
彗星の魔女

へろー天気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彗星の魔女

【Nコード】

N9432N

【作者名】

ヘロー天気

【あらすじ】

遙か昔か遠い未来か、とある世界のとある場所に強大な守護の力を持つ魔女がおりましたとさ——いつも通り寝坊したシャーヴィットは横着して転移魔法を使おうとした所で事故発生。不測の事態で飛ばされた先は、戦争の真っ直中だった。※※ある意味『無敵』の力を持つファンタジーな世界の魔法使いが宇宙戦艦同士の戦うSFな世界の惑星間戦争に行き掛かり上、干渉してしまうお話。

第一話（前書き）

なるべく気軽に読めるモノを気軽に書くというコンセプトで。

第一話

日当たりの良い窓際で揺らめく白いレース調のカーテンに濾され
たうらかな陽射しと、心地良いそよ風にまどろむ昼下がり。

適度に片付けられた部屋は質素な机に普通のベッド、壁際に並ぶ
本棚と色々な実験器具らしき容器のひしめく作業用テーブル、そし
て魔法陣を描く為の開けた床部分が特徴的だ。

ベッドの上には部屋の主である妙齡の女性が一人。乱れた寝着は
寝相の悪さか、ほぼ半裸状態でベッドに寝そべり惰眠を貪っている。

そんなノンビリとした部屋の空間に突如、無数の小さな光の粒が
生まれたかと思うと、それらは集束して光の球を形作った。そこか
ら響き渡る老人の声。

『また寝坊かシャヴィ！　こりやつ　起きんかシャヴィ！　シャ
ヴィット・ガルデ！』

「——んん——……」

自室で昼寝を楽しんでいた彼女は、聞き慣れた無粋な嗶声しゃがに嫌
々瞼を開いてベッド脇に浮かんでいる光の球を確認すると、声の発
生源であるそれをべしつと叩いて壁際に追いやった。幾何学模様の
蠢く光の球は尚も喚いているが、軽く無視して欠伸をしながら目を
擦る。

やがてふよふよと元の位置に戻って来た”伝球”に向かってシャ
ーヴィットは挨拶を向けた。

「おはよう御座います、院長」
『やっと起きたか！　　というか、お主今ワシの”伝球”叩いたじゃろ！』

「乙女のベッドに潜り込むからですよ、あーハズカシイ」
『ナニ！　　おかしいな、座標を間違えた覚えはないが……それはス
マンかった』

伝球の向こうで頭を掻き掻き自慢の顎髭を弄っているであろう院長にしれっと返した彼女”シャーヴィット・ガルデ”は、この国の護りを担う”守護者”と呼ばれる魔法使い達の中でも、とりわけ強い魔力を持つ守護者の一人であった。

『ああーそんな事よりシャヴィ、早く守護院に出てこんか！　講義はとっくに始まっておるぞ』

「まだ着替えも済んでないですしー、講堂まで転移使ってもいいですか？」

『まったく横着者が……講堂の前までなら許可する、早くせいよ』
「はーい」

院長の伝球が消えると、シャーヴィットは億劫そうにベッドから降りて寝着を脱ぎ捨て、”守護者”^{ガルデ}の院服に着替え始めた。

「さてと、着替え終了。退屈な講義でも拝聴に行きますか」

部屋の開けた床部分に立ち、転移陣を起動させる。自身の立ち位

置を中心に浮かび上がる転移陣の輪に魔力を繋ぐと、物体”自分自身”^{ット}を目標”守護院の講堂周辺”へと転移先を指定、座標の微調整に”講堂正面玄関”をイメージして最終的な転移位置を設定した。

転移陣が明滅を始め、シャーヴィットの魔力を燃料に空間を繋ぎ始める。と、そこへ――ヒラヒラと舞う一匹の蝶々が、彼女の強い魔力に惹かれて部屋の窓から迷い込んできた。紫色の羽から仄かに光る魔力の鱗粉^{りんぷん}を撒き散らしながら、転移陣の中へと潜り込む。

「え……ちよつとっ　なんでこんな上の階まで魔喰蝶が！」

通常、座標を間違えると大変な事故にもつながり易い転移陣の使用には転移先や転移させる物体を適当な紙などに書き起こし、一字一句間違えないよう慎重に読み上げて転移先の設定を行なう方法が使われる。その際、周囲の安全にも注意を払わなければならない。発動中の転移陣に使用者以外の魔力が混じるなどの干渉が起きると、座標や指定物の設定に混乱を生じさせる場合があるのだ。

シャーヴィットの部屋に迷い込んできた”魔喰蝶”とはその名の通り魔力を吸収して己が生命力とする魔法生物で、特に害のない生物なのだが、転移陣のような大量の魔力を必要としつつ魔力の乱れに滅法弱い繊細な魔法にはとても危険な害虫と化す。

「わーっ　中止中止！　転移中止！　とまってーっ！」

慌てて転移陣を停止させようと魔力の供給を遮断したシャーヴィットだったが、彼女の大き過ぎる魔力がアダとなった。

転移陣の使用に際しては本来、一般的な魔法使いならば例え守護者クラスの者であっても、起動から発動、転移までには魔力の充填にたっぷり一分近くは掛かってしまう。

しかし、シャーヴィットは魔力特待生ともいうべき魔力の持ち主で、魔法の使い方や成績が他の守護者達を下回る実力しかなくとも、その魔力の大きさ故に効率を度外視した魔力運用、要するに力押しでどうにかしてしまえる程の異常魔力を宿している。

「あああ駄目っ　とまらな——」

大騒ぎしながら咄嗟に魔法障壁を纏うシャーヴィット。部屋中に溢れる膨大な魔力の余韻を残し、座標の狂った転移陣は何処かの地へと彼女の身体を転移させた。

——静けさを取り戻した部屋の中では、おなか一杯になった魔喰蝶が満足そうにヒラヒラと舞っていた。

広大な暗闇の中に浮かぶ沢山の光点。恒星の光を浴びて輝く星々と多くの命を飲み込んだ爆発の光が交じり合う二つの惑星の国境宙域。劣悪な環境ながら豊富な資源を誇る惑星クアブラと、豊かな水源に多様な生物が生息する惑星シューハとの間で続いている星間戦争。

互いの惑星に兵を送り込んで侵略したりされたりを続けて凡そ百二十年。技術の発展と共に戦いの様相も変化していき、今や戦いの舞台は宇宙空間での艦隊戦を行なう所にまで至っていた。

「旗艦より入電、間もなく戦闘宙域に突入、貴艦は右翼艦隊後方の遊撃艦隊支援に回れとの通達です」

通信士からの報告を受け、艦長席に座るフェンナード子爵は頷いてメインモニターに視線をやると、味方艦隊の空母群を左上方向に見ながら右翼艦隊後方に集結中の遊撃艦隊へ合流する進路を指示した。

今回の戦いはシユーハ軍、クアブラ軍ともに主力艦隊を含む四個艦隊以上が投入されており、双方合わせて8000隻近い艦艇が集結する数年ぶりの大艦隊戦となる。総兵動員数約73万人という大会戦だ。

「緊張しますか？」

「それなりにね」

まだ歳若い艦長を氣遣うように声を掛ける副長に、艦長席のフェンナード・メツテはメインモニターを睨んだまま呟いて答えた。

シユーハの一地方領主であるメツテ家は代々クアブラとの惑星間貿易で財を成した交易商で、当時のシユーハ中央政府から資源確保に大きな貢献を果たしたと称えられて爵位を賜わった由緒ある家柄だが、その後のクアブラとの紛争では常に講和を訴え続けて反戦派に籍を置き、現在の中央政府とは対立気味な関係にあった。

対クアブラ強硬派が中央政府の重鎮を占めている為か講和派は発言力も低く、一部からは非国民扱いも受ける弱い立場にある。

この艦に配属されている副長ミーシア・エルレは、経験の浅い艦長を補佐するという名目でシユーハ中央政府から正式に派遣された正規軍士官であるが、実質、講和派であるメツテ家の行動を監視する目的で送り込まれた目付け役であった。

「とにかく、味方の後ろに隠れて生き残る事だけを考えていれば大丈夫ですよ」

「……それはまた、なんとも情け無い助言だと言いたい所だけ――」

――せいぜい味方の邪魔をしないよう、大人しく後方をうろついている方が無難だろうねと、フェンナードは自嘲気味に笑って見せた。

宇宙船技術の進歩と共に惑星間戦争の在り方も変わり、現在では如何に相手の制宙権を奪取できるかが戦いの勝敗を握る鍵となっている。

シューハ中央政府は今回の大規模戦を今後のシューハの発展と戦争の行く末を定める重要な会戦と位置づけており、各自治区の領主達に参戦の要請を打診しながら”遂にクアブラとの雌雄を決する時が来た”と大々的に宣伝しては国中に志願兵員を募っていた。

国民の大勢がこの会戦を支持しており、参戦要請に応じない者は事実上の反逆者と見做される世論が形成されていく中、講和派の中心となっていた伯爵家が参戦の意思を表明した事で、その派閥に属するメッテ家も他の傘下の者達と同じく参戦を余儀なくされた。

しかし、長いあいだ戦場からも遠ざかっていたメッテ家は領地の発展に腐心する一方で、自前の戦力を備える事には関心を払わずいた為、手持ちの宇宙船といえば交易用の輸送船ばかり。それも完全非武装の資源運搬船なのでとても戦闘に参加できる代物ではない。

所有している船の中で唯一の戦闘艦は、フェンナードの祖父が戦争初期の頃に乗艦していた護衛艦一隻のみ。

新しく艦艇^{ふね}を購入しようにも戦争の長期化で資源が厳しい問題もあり、建造費用も高騰している今の軍艦は中古の補給艦でもメッテ家の財力では手が出せない。結局、メッテ家は今や旧式となったこ

の護衛艦一隻で今回の大規模戦に参加する事となった。

老いた父に代わって爵位を継ぎ、現メッテ家当主となったフェンナード子爵は、祖父より受け継いだ旧式護衛艦”シャーヴィット号”で戦場に赴いたのである。

シユーハ軍の左翼艦隊がクアブラ軍艦隊の右翼側面へと移動を始め、互いに照準を向け合った両軍艦隊の間にそろそろ対艦レーザの帯が敷かれようかという所まで距離が近付いた頃、シユーハ軍右翼艦隊後方へ移動中だったシャーヴィット号の内部に異常が発生した。

『緊急事態・緊急事態——ブリッジに侵入者反応・P S確認できず・パーソナル・シグナル密航者と識別・保安部隊は直ちに出勤してください』

艦内スピーカーより響く保安システムからの合成音声に、緊張の色を浮かべる乗組員たち。戦闘が始まってもうどうせやる事は無しと、サロンでだらだら過ごしていた保安部の警備兵達は慌てて銃を手にとると、肩紐を引っ掛けながらブリッジへと急行する。

「密航者つつつてたけど、ブリッジにどうやって入ったんだ」

「さあな、ぼろっつい船だから、どっかセキュリティに穴でもあったんじゃないか？」

そんな緊張感に欠ける会話を交わしながら通路を駆け抜ける警備兵たち。やがてブリッジに到着した彼等が見たモノは——

「だ——か——ら——、ちょっと干渉されて転移に失敗しちゃった

んだってばっ 不可抗力よ不可抗力!」

「とにかく、艦長の上から降りろ!」

艦長席でなぜか目を回しているフェンナード子爵と、その膝の上でジタバタしながら訳の分からない事を喚く見慣れない服装の女。その彼女に銃を突きつけながら引き摺り降りろそうと格闘している副長の姿だった。

「なんだ、ありゃ?」

「さあ……」

第二話

大規模な戦闘が続くシューハとクアブラの国境宙域。シューハ軍の右翼艦隊後方にて遊撃艦隊とその支援部隊に合流を果たしたメツテ家の旧式護衛艦シャーヴィット号は、別命あるまで待機の指示を受け、先行する主力艦隊の砲撃戦を眺めながら全艦待機中であつた。

ブリッジの艦長席に突然振つてきた正体不明の女性によって軽い打撲と脳震盪に見舞われていたフェンナード艦長も、今は回復して職務に復帰している。

正体不明の女性――”シャーヴィット・ガルデ”と名乗った密航者と思しき彼女は、現在営倉に拘禁され尋問を受けているようだ。

「シャーヴィットか……自分と同じ名前の艦だから、密航に選んだのかな？」

「私には分かりかねますが、彼女は色々と不可解です」

「確かにね……」

まず何処から降ってきたのかが分からない。この艦のブリッジは戦艦や巡洋艦に見るような天井の高い作りにはなっていないし、人が隠れられるようなダクトも通っていない。彼女が落ちてきた後も、天井に破損箇所などは確認できなかった。

「ずっと天井に張り付いていたとも思えないし」

何故か異常に硬かったと記憶に残る彼女の尻の直撃を受けてフェンナードが早々に意識を手放していた時、咄嗟に銃を構えた副長のミーシアが誰何を行なったところ、最初は翻訳機も反応しない不明な言語で話していたようだが、言葉が通じない事を理解したような態度を見せると、急にシューハの標準語を喋り始めたという。

「身元や目的もはっきりしませんし、何よりPSチップパーソナル・シグナルの処置が施されていない事も氣になります」

「でも、クアブラのスパイという線は……ちよつと考えられないかな」

シューハでは生まれた時から体内に個人情報の蓄積や認証を行う為の生体チップを埋め込む事が義務付けられており、このチップが無ければ公共施設の利用や買い物は勿論、普通に街中を歩く事さえ困難になってしまう。

数メートル毎に国民IDの認証不良によって警報が鳴り響き、周りに大層注目を浴びる事になるだろう。

「一体、どうやってこの艦に乗り込んだのか……」

「僕には空中から突然現われたように見えただけだね」

「艦長……慰安艦でやってるマジック・ショーじゃないんですから」

シャーヴィット号自体が旧式艦の為、搭載されている保安システムも現在のシューハ軍に正式採用されている統合リンクシステムとは互換性の問題で一部繋がっておらず、侵入者警報があった事実はまだ艦隊の上層部にも知られていない。

只でさえ講和派として目を付けられている上に、これだけの大規

模戦に旧式艦一隻のみでの参加という悪目立ちしているメッテ家としては、作戦行動に部外者が紛れ込んでいた等という不祥事はこのまま隠しておきたい所だ。

幸いにも目付け役である副長のミーシアはメッテ家の立場に理解を示し、フェンナードに味方してくれている。

「とにかく、このまま何事もなく会戦の終わりまで生き延びることが出来れば、後はどうとでも出来るでしょう」

艦の乗組員^{クルー}に緘口令を敷いて保安システムのログを一部改竄、密航者の情報は削除した上で軍情報部に会戦での航行記録を提出すれば良いと、ミーシアは今回の出来事に関する隠蔽処理を組み立てた。

「ありがとう副長。本当に助かるよ」

「い、いえ……」

あまり荒事とは縁のなさそうな穏やかで優しい笑みを浮かべるフェンナード子爵に、真っ直ぐな感謝の瞳を向けられたミーシアは、思わず跳ねた鼓動を誤魔化そうと帽子を直す振りをしながら目線を逸らした。

あと二、三日は戦闘にも絡みそうにないシャーヴィット号のブリッジにて、艦長と副長がなにやら良い雰囲気になっている頃――

「ねえ、そういう構造なの？　なんで絵が出るの？　このテール素材は何？　この重力って制御はどうしてるの？」

この艦と同じ名を持つ密航者は営倉で尋問を受けながら、担当の警備兵を困らせていた。

建て付けが悪いのか、ガーッと音を立ててスライドする扉をくぐって食堂へ入った警備兵達は、今朝方ブリッジに侵入して逮捕拘禁されている密航者らしき人物を話題に雑談を交わす。

「供述を纏めるとだな、紫色の蝶々が飛んで来たせいで意図せず乗艦してしまった、という事らしい。意味は分からん」

「蝶々？ 蝶々ってあのヒラヒラ飛ぶ奴か？」

「ああ、そのヒラヒラ飛ぶ奴だ」

「なんだそりゃ？ あの娘、何か薬でもやってるのか？ 見た目は若くて健康そうなのに」

どうにも要領を得ない尋問結果に業を煮やした保安部の警備部長が自白剤の使用許可を申請しているらしいという話に、嫌悪の表情を浮かべた者と好奇の表情を浮かべる者との反応が別れる。

「ただの密航者に自白剤なんて……どうせデ部長の口実だろ」

「中々いい女だったもんなっ」

「生体チップが入ってないって話だから、もしかしたら違法クロールかもしれないぞ？」

「違法クロールでも自我が確立してりゃ立派な人間さ。俺は人の尊厳を踏み躪るあの薬は大嫌いなんだ」

シューハ軍で使われている自白剤は強い催眠効果によって情報を聞き出すだけでなく、ある程度の精神コントロールが可能で多少の記憶操作も行なえる為、稀に軍から持ち出された薬が犯罪に使われ

る事もあった。

この艦に左遷されて来た現警備部長は前の勤務先である収容所で度々自白剤を使って女性囚人などに性的な虐待を繰り返していたという噂が囁かれており、親しい者の中にそういった犯罪の被害者を持つ警備兵の一人はかなり不審の眼を向けている。

「強硬派の中でも随分上の方と繋がりがある人らしいな？ あのデ部長」

「家柄だけなら士官学卒で即巡洋艦の艦長ってレベルの家らしいぜ？」

「うわー強硬派のエリートかよ、うちの艦長は講和派だったよな」
「ああ、副長は中央から派遣されて来てる人だけど……まあ、ノータッチだろうな」

栄養価の高いブロック状の質素な食事を取りながら『営倉を覗きに行こうか、止めておいた方がいいか』等と会話を続ける警備兵たち。と、その時――

『ミサイル群接近・緊急回避行動・回避不能コース2・シールド出力120%・着弾まで5・4・3・2・1――』

合成音声の警告アナウンスが一瞬途切れ、衝撃音と共に艦全体がぐらりと揺れて振動が走る。流れ弾か急襲か、敵艦からのミサイル攻撃を受けたシャーヴィット号は大きく船体を傾けながら、次の回避不能コースを来るミサイルをどうにか躲そうとスラスタを噴射する。

『ミサイル自爆・右舷外装甲30%剥離・後部スラスタ1破損・右舷ミサイル発射管全門破損・シールド出力75%・艦内に火災発生』

――』

次々と流れる被害アナウンスに、艦内の彼方此方で乗組員達が慌しく動き回り、食事中だった警備兵たちも消火活動の手伝いや負傷者救助の応援にダメージを受けた区画へ走りだす。

食堂に設置されている戦況モニターには、隣を航行中だった味方の護衛艦が火達磨になって爆沈する姿が映し出されていた。

「うーっわやべえ！ あと一発貫ったら沈むぞこれ」

「隔壁の下りてない場所は手動で下ろすしかないな。全員ヘルメットを装着、空気漏れに気をつけろ」

『四時後方より敵艦隊接近・照準レーザー照射警報・ミサイル群接近・緊急回避行動・回避不能コース5・シールド出力60%――』

「ぎゃー！ 詰んだー！」

「ああ、こりゃ駄目か……」

絶望的な状況を淡々と告げる警告アナウンスに頭を抱えて喚く者、達観した表情でここまでかと呟く者。完全な奇襲攻撃を受けて、もはや脱出する猶予も残されていないシャーヴィット号の乗組員達は、誰もがここでの戦死を覚悟した。

「すまないね副長、こんなボロ船につき合わせてしまったばかりに……」

「艦長……御自分の艦を悪く言うモノではありませんよ？ この船は、良い船です」

若きフェンナード艦長を最期まで補佐すると決めたミーシア副長は、そう言って優しく窘めると、艦長席の隣に一步下がって並び立つ。

着弾までの無機質なカウントダウンが進む中、船体の破損によって艦全体に広がっていた振動がふいにピタリと治まった。何か、温かい膜にでも覆われたかのように、艦内全域が穏やかな空気に包まれる。

「これは……？ 揺れが治まったようだけど」

「はて、機関が停止した訳でも無いようですが……」

『4・3・2・1——着弾・船体に影響なし・シールド出力60％・対艦レーザー発砲確認・着弾・船体に影響なし——』

警告アナウンスは敵奇襲艦隊から次々と飛来するミサイルやレーザー砲の着弾を淡々と告げるが、同時にそれら攻撃による影響も無い等という在り得ない結果も淡々と告げている。メインモニターには次々と沈められていく味方支援部隊の壊走が映し出されていた。

「一体、何が……」

「っ……！ 各ブロックに被害状況を報告するよう指示を出せ、整備班には脱出艇の準備を急がせろ！」

暫し呆けていたミーシア副長はフェンナード艦長の眩きで我に返ると、矢継ぎ早に指示を出して同じく呆けていたブリッジクルー達の目を覚まさせた。一斉に自分の仕事を始めるクルー達。やがて艦内の状況や被害報告が入り始める。

実質的な被害は最初に直撃したミサイルや自爆したミサイルによる装甲の一部破損と、幾つかの武装に不具合が出ている程度。

艦内各所で発生した火災も直ぐに消し止められたので、少々内装が焦げたくらいで済んでいる。火災で焼き切れた配線なども応急処置が施され、機能は十分に回復していた。他は乗組員に多少の怪我人が出たといった所だ。

「船体の破損箇所はどうなっている」

「空気漏れを確認したブロックは隔壁閉鎖で対処しましたが、今上がってきた報告によりますと亀裂は既に何かで塞がれているそうです」

「何か……、とは何だ？」

奇妙な報告に眉を潜めるミーシア。が、通信士も”何かで塞がれている”としか報告が来ていないので返答に困っている。

『敵艦隊更に接近・照準レーザー照射警報・対艦レーザー発砲確認・着弾・船体に影響なし——』

そのアナウンスに皆がメインモニターへと視線を向けると、クアブラの高速艦で編成されていると思われる奇襲を仕掛けて来た少数艦隊が、かなりの速度で真っ直ぐこちらへと向かって来ていた。

支援対象であった味方の遊撃艦隊は、これ以上の被害を抑える為に一旦距離を置く判断を下したらしく、この宙域から離脱して行く。艦長席に座り直したフェンナードはとりあえず現在の正確な状況を把握する事に努めた。

「支援部隊の他の船は？」

「殆ど逃げてしまったようですね、ここに残っているのは撃沈された艦と私達だけのようです」

「そうか。所で、さっきから砲撃を受けているようだけど……」
「現在調査中です」

メインモニターに映るクアブラの艦隊からは対艦レーザーによる幾重もの青白い帯が伸びて来ては、何度もシャーヴィット号に直撃しているようなのだが、まるでシミュレーション映像の如く着弾の効果が見られる事は無かった。

この不可思議な現象に、もしやこの艦はとっくに撃沈されていて、実は艦も乗組員も死後の世界にいるのでは？ と、自分達の実在を疑う者まで現われ始めた時――

「あなた達って無茶苦茶な命の使い方してるのねー」

ブリッジに響いた声に皆が振り返る。

「さっきの光と爆発だけで二千人近く死んだわよ？ なんかやけにペラペラの魂も多かったけど」

今朝方ブリッジに降って来てフェンナード艦長を尻でノックアウトした密航者。この艦と同じ名を持つ謎の女性、シャーヴィット・ガルデの姿があった。

「保安部に警備兵を寄越せと伝えろ！ 密航者がまたブリッジに来ているぞ！」

直ぐに反応して銃を抜いたミーシアがフェンナードを護る立ち位置に素早く陣取ると、シャーヴィットを威嚇しながら指示を出す。

そんな彼女に、まあまあ落ち着いてと両手を広げて見せたシャーヴ
イットは、メインモニターに映るクアブラの艦隊に視線を向けた。

「うーん、他所の戦争に介入するのは”守護者”^{ガルデ}の禁則に触れるん
だけど……とりあえず、アレをなんとかしないと帰れそうにないの
よね」

人差し指で下唇をつんつん押し上げながらそんな事を呟いたシャ
ーヴィットは、この巨大な鉄の船を覆わせてある保護の魔法を継続
する為に必要な魔力と、緊急避難的危険性排除の行使、所謂攻撃魔
法に回せる魔力を計算する。

「うん、何とかなりそう、かな？」

第三話

高速艦の足を遺憾無く使って戦闘宙域を大きく迂回し、シューハ軍右翼艦隊後方への奇襲を成功させたクアブラの強襲艦隊を指揮する提督は、先程から艦橋の正面モニターに捉えている目標、識別ではシューハ軍所属の護衛艦とされている艦艇に訝しむような視線を向けていた。

「ではホログラムの類ではないのだな？」

「はい、確かに初撃のミサイル攻撃でダメージを負っているのは間違いないようですので――」

攻撃開始直後からの記録映像で確認した限り、こちら側からの攻撃で周りの艦が沈んでいく中、その艦は被弾と回避行動で姿勢を崩しながら泡のようなシールドらしき膜を展開。その後はミサイルであろうがレーザーであろうが全ての攻撃を防ぎ続けてこの宙域に留まっている。

「ふむ……新型シールドの実験艦かもしれん。拿捕しよう、突入部隊の準備を――」

「敵艦に動きあり！ 我々の艦に照準レーザーが照射されています！」

「なんだと？ この状況で……いや、実験艦であるなら情報の隠滅に自爆か玉砕を選ぶ、という事か？」

態々旧式艦を使っている事からして、撃沈されても痛くない廃棄寸前の艦に新型シールドを搭載し、実戦に投入して何処まで使い物になるかという実証実験を行なっていた可能性を睨むクアブラ軍の提督。この猛攻にも耐えられる程の強力なシールド。是非とも手に入れたい。

「一応、投降を呼び掛けてみるか。その間に第一、第二部隊を後方に回り込ませて包囲だ。敵の援軍に注意しろ」

”護衛艦シャーヴィット号”のブリッジでメインモニターを見上げる”守護者シャーヴィット”は、照準レーザーでロックされたクアブラ軍の艦隊を見据えながら必要分の魔力を練り始める。

「これでいいのかい？」

「ええ、目標がはっきりしてる方が狙い易いから。それにしても便利な技術ねえ」

シャーヴィットは自分の要望と提案に伝えてくれたフェンナード艦長の問いに答えると、安心させるように微笑んで見せた。そんな二人のやり取りに微妙な心境で複雑な表情を向けるミーシアは、彼女がブリッジに現われてからの一連の出来事を思い起こす。

——取り引きしたいんだけど、ここで一番偉い人は誰？

シャーヴィット・ガルデと名乗る密航者は、そう言って自信に満ちた笑顔を見せた。

「ふざけるなっ　今は非常事態だ、不審者の身柄を考慮している余裕はない。大人しく営倉に戻りなさい！」

銃を向けたまま厳しく威嚇するミーシアに対し、『ふむ……』と小首を傾げる仕草を見せたシャーヴィットは、スツと片手を前に伸ばす。思わず警戒するミーシア。高まる緊張感に成り行きを見守るフェンナード艦長や他のブリッジクルー達。

皆が注目する中、シャーヴィットは握手を求めるような格好で差し出した手を上に向けると、くいつと中指を曲げて見せる。瞬間――

「ひっ……！　きゃああああ！」

ミーシアは彼女らしからぬ悲鳴を上げると、赤面しながら股間の辺りを抑えて座り込んだ。

一体何事かとブリッジにいる全員の注意がそちらに向いた隙に、シャーヴィットは念動を使ってミーシアの銃を引き寄せる。自分の手から勝手に跳びだして行く銃を呆然と見つめるミーシア。銃がシャーヴィットの手に移った事で、ブリッジクルー達は一斉に青褪めた。

「副長！」

咄嗟に飛び出してきたフェンナードが座り込んでいるミーシアを庇うように立ちはだかった。自分が護るべき相手に護られていると

いう構図で我に返ったミーシアが立ち上がろうとするのを抑え、フエンナードはシャーヴィットと対峙する。

「……君の目的はなんだ」

「うん。とりあえず、取り引きをしたいんだけど、その前に――」

ひょいっと銃を投げて返したシャーヴィットは、クアブラ軍の艦隊が映し出されているメインモニターを見上げて言った。

「まずアレを何とかしてから、ゆっくりお話ししましょ」

そうして今、彼女の要望に応える形で敵艦隊に照準レーザーを照射し、メインモニター上に正確な距離や位置を表示させている。クアブラ艦隊からの砲撃は止んでいるが、今はまだ戦闘継続中なのだ。この状況で相手に照準を向ける事は交戦の意思を示す事にもなりうる。

「艦長……よろしいのですか？ 相手は得体の知れない密航者ですよ？」

「どうだろうね。少なくとも、さっきの報告を聞いた限りでは僕たちの敵ではなさそうだ」

先ほどの騒ぎの後、保安部や各所から上がってきた報告によれば艦内の至る所で『通り掛かった』という彼女が消火活動や救助活動に協力してくれていたらしく、どういう技術を使っているのか、人や重い資材などを浮かして移動させたり、不思議なジェル状の物体で船体の穴を塞いだりと、かなりのダメージ回復に貢献してくれた

ようだ。今現在この艦を護っている不思議な膜も、彼女が仕掛けたものらしい。

「小型の重力制御装置か何かでしようか……？ この艦に新型のシールドを搭載する為に密航を？ もしや、軍上層の意向で極秘任務――」

「彼女が何者なのか、僕にも分からないよ。それより副長、大丈夫かい？ さっきは一体何が？」

ミーシアの言葉を遮って身体を気遣うフェンナードに、彼女はさっと顔を赤らめると何でも無いですと言って誤魔化した。

「副長？」

「も、問題ありませんから、どうか御気になさらずに」

特に怪我をした訳でも無いので、あまり訊かないで欲しいと言外に訴える。あの時、思わず悲鳴を上げて座り込んでしまう等という失態を演じた事に恥じ入るミーシアは、メインモニターを睨みながら何やら考え込んでいる様子のシャーヴィットに恨みの籠った視線を向けた。

――大事な所を撫で上げられて一瞬腰が碎けた等とは口が裂けても言えない。実際に触れられた訳でも無いのに、やけに生々しい感触が残っている。色んな意味で早く下着を換えたいミーシアであった。

「えーと、こうかな？」

呟いて手を捻る動作をするシャーヴィット。すると、メインモニターに映し出されているクラブラ艦隊のマークーに変化が起きた。

「て、敵艦が機関を停止しました！」
「なんだった？」

オペレーターの報告にモニターを見上げるフェンナード艦長とミ
ーシア副長。確かに、クアブラ軍の状態を表示しているマーカーは
艦艇の機関停止状態を示している。

「シャーヴィット、これは一体？」

「んー、魔法でちよいちよいっとね？」

「魔法？」

シャーヴィットは尋問を受けている間、チャーム系魅了の魔法で少々
協力的になって貰った警備兵から色々聞き出して、この世界のおお
よその事を学んだという。

「この世界？」

「うん、まあ正確にはこの宙域周辺？　って事になるのかしら」

自分はこの辺りに住む人間ではないと答えるシャーヴィットに、
フェンナードはシューハやクアブラよりも離れた場所にある有人惑
星の事を思い浮かべたが、あそこは年中氷に覆われた極寒の資源惑
星で、入植者も地下資源の採掘に必要な少数が家族単位で入ってい
るだけだ。

半年に一度、高速運搬船団が定期便として行き来しているだけの
辺境。シューハ、クアブラの双方に属しない第三勢力となりうる組
織が存在するとも思えない。極秘の軍事研究施設でもあるのかと考
える。

「その、魔法というのは軍事機密の隠語か何かと理解していいのか

い？」

「ううん、魔法は魔法よ。あなた達とは体系の違う文明から発展した技術って所かしら」

詳しい説明はこの際省くとしたシャーヴィットは、とりあえずこの宙域から離れる事を提案する。宇宙船の何処をどうすればどうなるのかを大体把握した上で、敵艦の機関部を狙い撃ち。今は一時的に機能を麻痺させているだけなので、暫らくすると動き出す筈だという。

「よく分からないが……確かに、逃げるなら今のうちだね」

フェンナード艦長の指示に従い、護衛艦シャーヴィット号は他の味方艦隊と合流すべくこの宙域からの離脱を始めた。

実験艦と思しきシューハの艦に降伏勧告を出そうとした矢先、突然全艦の機関が停止してしまったクアブラの強襲艦隊は、混乱しつつも制御装置に発生した原因不明の障害を取り除き、どうにか復旧に漕ぎ付けていた。

「目標艦、宙域から離脱して行きます」

「むう……もしか、今の障害もあの艦の仕業なのでは……？」

この状況からの深追いは危険過ぎる。そう判断した強襲艦隊の提督は自分達も本隊に戻るべく転進の命令を下すと、ここで遭遇した

『強力な新型シールドを搭載し、艦の機関に障害を及ぼす機能を備えた実験艦』のデータも送るよう指示を出した。

「戦いは始まったばかりだ！ 次の戦場に備えて皆十分に休養をとっておけ！」

各艦から了解の返答を受け取りつつ、味方艦隊の本隊に向けて進路を取った強襲艦隊の旗艦は速やかにこの宙域から離れていった。

壊走した支援部隊の生き残りが再集結する宙域に到着するまで半日は掛かるという事で、安定航行中のシャーヴィット号は本格的な修理を始め、艦長のフェンナードと副長のミーシアは艦長室にて密航者であったシャーヴィット・ガルデと極秘会談を行っていた。

「始めに言っておくけど、あたしはあなた達が住む惑星？ シューハとクアブラ、どちら側の人間でもないわ」

「では、やはりブラッタの住人なのか？」

「ブラッタ……ああ、氷の惑星の事ね。違うわ、もっともっと遠い所、そうね……この”光年”とかいう無茶苦茶な単位で表すなら——」

ざっと160億光年ほど離れた場所から来た事になるのだという。ミーシアが流石に呆れてみせる。

「出所や所属を明かせないなら明かせないと言えれば良いでしょう、真面目に話してください」

「いや、至極まじめなんですけど……」

「160億光年というところ、確か現宇宙の端から端くらいの距離になるのかな？」

「艦長も付き合わないで下さい」

ともかく正体を明かせないのは分かったので目的を言えと迫るミーシア。不本意ながら彼女の持ち込んだ謎の技術によって絶対絶命の危機を救われたのは間違いないさそうなので、取り引き内容が無茶な要求でなければ検討しても良いと告げる。

「艦長もそれで良いですね？ 本当に軍の上層が関わっていないのなら、さっきの戦闘の事も含めて色々隠蔽しなければなりませんから」

「ああ、重ね重ね苦労を掛けるけど」

ろうフェンナードに、それが仕事ですからとミーシアは肩を竦めて見せる。が、本来であれば講和派のメッテ家が所有するこの艦で起きた出来事の全てを上報告するのが彼女の仕事である。かなりの私情が入ってしまったという事は、ミーシア自身も自覚している所であった。

「まあ、その辺りの事情はよく分からないから其方そちらに任せるわ。あたしの要求は一つ、何処か静かな場所に降ろして貰う事よ」

「？ それは、シューハの何処かに潜入したいという事かい？」

「静かな場所なら何処でも構わないわ。この辺り一帯は循環する魂の流れが酷すぎて、転移陣を安定させられないのよね」

「魂？ 意味がよく分からないのだが……」

首を傾げる二人に、シャーヴィットは魔法の概念から説明しても理解できないだろうと考え、相手側の概念に添った言葉で説明する。

「ようするに、ワープみたいな移動法があるわけよ。で、あたしはそれを使って帰りたいんだけど、使える条件が限られてるの」

「ワープですって？ そんな技術、確立されている筈が……！」

「み……いたいなモノよ」

「しかし、降ろすといってもこの船は現在作戦行動中なんだ。指令部の許可無く勝手に惑星圏まで戻る事は出来ない」

味方と逸れて単艦航行中の現在でも、シューハ艦隊の本隊には常に位置情報が送られている。上からの指示無しであまり自由に動くことは許されない。ついでに旧式艦であるシャーヴィット号は航続距離が短く、ここからだ補給を受けなければ惑星までの燃料が持たないのだ。

「え”、この船って実はボロいの？」

「ボロいねえ、下手すると二世代前の船だからねえ」

「艦長」

ジロリと睨むミーシアに苦笑を返すフェンナード。実際古い艦なのは事実なのだから仕方がない。

あちこち痛んでいるし、どこか歪んでいるのか扉の開閉にも音が鳴るし、偶に途中で引っ掛かって止まるし、艦内照明なども現在の宇宙船では標準的に使われている発光内壁と規格が合わない為、適当に配線を繋いで無理矢理貼り付けた状態で使っている。

「な、名前が同じだけに、なんだか複雑な気分だわ……」

航路の途中にも補給艦部隊は点々と待機しているので、正式に艦隊上層部に申請して受理されれば一旦シューハに戻る事も可能ではあるが、今度の会戦はシューハとクアブラの双方が全軍を上げてぶつかる総力戦とも言えるような規模の戦いだ。

「相応の理由が無ければ受け入れられないだろう」

「うーん、困ったわねえ。これじゃ戦いが終わるまで帰れないわ」

「君のいうワープのようなモノは、地上でなければ使えないのかい？」

「基本的には何処でも使う事は可能よ。ただ別の次元を通るから、その流れを乱す要素が強いと座標が定まらなかったりするの」

戦場に限らず、沢山の人の命が失われているような場所や状況では転移の通り道に使う次元に乱れが生じ易いのだという。

「別の次元というのが、よく分からないな」

「身体から離れた人の魂が最初に通る比較的現世に近い次元で——って話しても、根本的に文化の持つ概念が違うから意味無いわね」

とにかく、あまり人の死なない所、戦場から遠く離れた場所に連れて行って貰うか、でなければ戦闘が終わるまでお世話になりますという事らしい。

「お世話になりますって……」

「それって、つまりこの艦に居座るという意味なのでは……？」

「しょうが無いじゃない、こんな何百人単位でポコポコ人が死んでくような場所じゃあ危なくて転移陣つかえないんだもん！」

『だから暫らく養ってねっ』と、半ばヤケクソ気味に宜しく願
いするシャーヴィット。

いまさら乗組員の一人や二人増えた所で特に問題は無いと考える
フェンナード艦長は、寧ろ彼女の持つ謎の技術の助けがあれば、先
程のような危機に陥っても生き延びられる可能性が高いと判断した。
ミーシア副長も同じ考えらしく、目が合うと軽く頷きを返して応え
る。

「分かった。非公式になるが、君をこの艦の乗組員に加えよう。役
職は……何か適当に考えよう」

「後でP Sチップの入った身分証を発行しますので、常に身に付け
ておくようにして下さい」

「P Sチップ……あー、あのなんか契約の楔みたいなヤツね。身体
に入れたりしないのならいいわ。あっ それと――」

出来れば自分の身分は警備部長より上にして欲しいと、シャーヴ
イトは身分証の発行に注文をつけた。

営倉で尋問を受けていた時、警備部長を名乗る恰幅の良すぎる男
が洗脳効果のある薬を自分に使おうとしたので、その時はチャーム
を使って躲したが、この先も何か仕掛けてくる度に魅了していたの
では相手の精神が負荷で異常をきたし兼ねないのだと。

「洗脳効果のある薬だって？」

「ちらっと鑑定したダケだったんだけど、かなり強力な薬みたいだ
ったわよ？　こーんな、白い筒に青い線が入った容器で」

「っ！　それって、自白剤の事では？」

「確かに使用の許可申請は来ていたが……僕は許可を出していない」

警備部長の素行については乗組員達の間でも悪い噂が立っていたが、まさか左遷先の艦に来てまで噂通りの狼藉をやらかすと思わなかったミーシアは眉を顰めた。

「警備部長の事については、暫らく伏せておこう」
「艦長、しかし！」

「この件を使って彼女シャーヴィットの事を口外しないよう上手く取り計らえないか？」

「……分かりました。緘口令に従わせるには、良い材料になります」

ミーシアは一つ溜め息を吐きながらも、中々に策士な一面を見せるフェンナードを意外そうに見上げた。彼女の表情から考えを読み取ったのか、フェンナードは『僕だってやる時はやるよ?』といった雰囲気で微笑んで見せる。

「えーと、いい感じで見詰め合っているとスミマセンが、あたしのお部屋とか用意して貰えるよね? ね?」

流石にあの圧迫感のある狭く苦しい営倉で寝泊りするのは勘弁願いたいと訴えるシャーヴィットに、咳払いなどしながら取り繕った艦長殿と副長殿は、すぐに余っている部屋で都合の良い場所を調べると言って机に設置されている端末を立ち上げるのだった。

シャーヴィット号の前方には集結中の味方艦隊を表す光点が徐々に増え始め、本隊のいる後方宙域では絶えず大小の光が瞬いていた。

第四話

オートメディカルシステムの器機が並ぶ普段は無人の医務室にて、それらの機械を弄くりながら暇を弄んでいる白衣を纏った妙齡の女性。緊急医療顧問という適当な役職を貰ったシャーヴィットは、とりあえずの持ち場としてこの医務室を普段の待機場所に与えられた。

駆逐艦以上の大きな船になれば軍医が乗艦している場合もあるが、医療機械が発達しているシューハの艦には多少の怪我なら直ぐに治療や修復をしてくれる治療装置が積まれており、基本的に医者はいらない。

装置の端末を操作してマニュアルを読んでいた彼女は、この治療装置を使えば切断された手足の結合や復元再生まで可能である事に驚く。状態次第では蘇生も可能。更に驚いたのは、人間の複製が合法的に行なわれているらしい事だ。

「複製した人間をこうした戦場に送り込んでいるわけか……あのやけにペラペラな感じの魂は、そういう事だったのね」

クローン人間は主に危険な作業や効率的な学習媒体、その他娯楽などにも使われている。特に興味深いのは、クローンが覚えた特定の動き、作業や運動などの情報を取り出し、オリジナルの人間に還元する事で学習効率を上げるというクローン学習。

「クローン体の脳内に形成された特定の運動を司る細胞を複製する事で、オリジナルの成長効率を飛躍的に向上させる——か、ふーむ」

複数のクローン体に色々な事を学習させ、その経験の一部をオリジナルに移植複製する事で、初めて行なう事でも何となくやり方を知っているような状態で行なえるという仕組み。経験を売る者と買う者とで、スキル販売というビジネスが成り立っていた。

ホームクルス 人工生命体の研究はシャーヴィットの住んでいた世界でも珍しくは無いが、こういう使い方は珍しいとばかりに詳しく資料を読み漁る。

『シャーヴィット』

「ん？ はいはい？」

ブリッジからの通信に端末内の窓を開いて答えるシャーヴィット。
”伝球”より便利かもしれないと、使い勝手の良さに関心を向けながらすっかり異文明の利器を使いこなしている。

『我々は間もなく支援部隊と合流して中央艦隊の補給部隊を護衛する任務に当たる事になった。すまないが——』

「分かったわ、直ぐにそっちへ行くから」

端末を閉じて立ち上がったシャーヴィットは、ブリッジへ向かうため医務室を後にした。

シユーハ軍艦隊の本隊後方、空母群の中に設けられた中央艦隊総司令部では、先のクアブラ軍強襲艦隊による奇襲で受けた被害報告と今後の対策、艦の補充や再編成について話し合われていた。

最も被害を受けた支援部隊を補給部隊の護衛に回しつつ、最小限の被害で一時撤退してきた遊撃艦隊の扱いをどうするかという所で少々話が拗れている。

「そもそも味方を見捨てて逃げ帰ってくるとは何事か！」

「いや、記録を見た限り完全に不意を突かれて現場はかなり混乱していたようだ。あの状況でこれだけの被害に抑えられた事は評価できる」

「しかし碌に反撃もせずに撤退したせいで、後方を脅かされた右翼艦隊が押し込まれる破目になった」

緒戦で早々に側面を突いて得た勢いが完全に削がれてしまい、今はほぼ膠着状態に陥っている。遊撃艦隊の指揮官に対する責任を求める声上がる中、奇襲を防げなかった支援部隊にも問題があったのではないかという指摘が示された。

「今回の奇襲を受けて支援部隊の二割が撃沈された事になっているが、彼等は遊撃艦隊が退く前に壊走したそうではないか」

「……遊撃艦隊の支援に回っていた部隊は七割が講和派で構成されていましたな」

居並ぶ提督達の視線が、講和派の中心人物である伯爵に向けられる。彼も直接指揮する艦隊こそ持っていないが、由緒ある家柄と軍艦建造に必要な資源や軍資金確保の根回しでシユーハ中央政府に大きく貢献しており、その身分は他の提督たちに引けをとらない。

強硬派で占められる政府上層においても、講和派としては比較的強い発言力を持つ。そんな彼の傘下の者達で構成される支援部隊の

行動に対し、『脆すぎるのではないか？』と疑いの目が向けられているのだ。

「普段から戦いたくないと訴えておった者達だ。ノンビリ後方で控えていた所に奇襲など貰えば、たちまち崩れるのは当然の結果だろう」

寧ろ彼等が標的として犠牲になったからこそ、遊撃艦隊は大した損害も無く撤退出来たのではないかと主張する伯爵。その意見には殆どの提督たちが至極尤もだとして納得するが、最初に疑惑の質問を向けてきた提督が現場宙域の監視データーを元に一つ、疑問を投げ掛ける。

奇襲を受けた現場宙域にて、クアブラ艦隊と対峙したまま長く留まっていた艦があるのだという。追撃もされず無事に戻って来たようだが、敵艦隊の動きにも不審な点が残ると指摘する提督は、その監視データーを全員の端末画面に送りながら伯爵に視線を向けた。

件の艦が宙域を離脱する際、何故か敵艦隊が数十秒間機関を停止している事など、監視データーを見た他の提督達からも確かに不審な点があると疑問の声が上がる。

「一体、何があつたのやら」

「その艦とは？」

「護衛艦シャーヴィット号。メッテ家の所有する艦ですな」

「メッテ家といえば……あの老朽艦一隻でこの会戦に参加するなどという、ふざけた態度を見せた輩か！」

不可避の参戦要求に対する中央政府への抗議を表明しているのではないか、と見られているメッテ家の対応について、伯爵は誤解で

あると擁護した。メッテ家は単に使える軍艦を持っていなかったダケなのだ。

「買えば良いでは無いか」

「近頃は軍艦も高くなっておるからな。メッテ家の財力では新しい艦の発注など出来なかったと聞いている」

「メッテ家の領地は民の暮らしもかなり潤っているそうだが？」

「領地の開発に資金を注ぎ込んでいるからこそその発展と言えるだろう。知っての通りメッテ家は我が傘下に並ぶ講和派だ」

戦備の充実よりも開発と発展を主軸に活動している。メッテ家は先代からそういう方針であったのだと、講和派のしがらみという立場をぶっちゃけて説明する伯爵に、そこまで腹を割って話されては疑うべくも無いと疑問を下げる提督達。

「では、敵艦隊の機関停止やその後に追撃が出されなかった事については、どうお考えか？」

「さてはて、クアブラ軍は本来厚い装甲と大量のミサイルという物量を武器にした戦い方が基本であったからな」

強襲艦隊のような機動力を活かした戦法を使う艦隊はクアブラ軍の中でも珍しい。艦艇の強固さではクアブラの豊富な資源にモノをいわせた重甲戦艦が抜きんでているが、シユーハの艦艇は汎用性と機動力に優れる。

「慣れぬ高機動戦法など使って機関にトラブルでも起こしたのでは無いか？」

「攻撃が途中で中止されている事については？」

「支援部隊は壊走、遊撃艦隊は撤退、取り残されたのは被弾した老朽艦一隻。哀れみで見逃されたのかもしれない」

そんな調子で飄々と返された提督は尚も追及しようとしたが、他の提督達から諫められた。講和派に対する圧力も流石にここまであからさま過ぎると、周りから向けられる視線も冷たい。

「もう良いでは無いか、敵味方共々に奇妙な行動など戦場ではよくある事だ」

「メッテ家に叛逆の意思など見えぬしな」

「今はこの膠着状態から如何に優位な戦況へ持ち込むか、その作戦を考えようではないか」

「うむ。やはりここは遊撃艦隊に雪辱の機会を与えてやるのが順当かと思う」

主題を遊撃艦隊の処遇に戻した会議は、クアブラ軍艦隊に攻勢を掛けるべく作戦が練られると、遊撃艦隊にその先鋒を任せようという結論で落ち着いた。そのまま終了するかと思われた会議は、先程の強硬派に属する提督が提案を一つ付け加えた事により、若干長引く。

件の護衛艦を遊撃艦隊に加えて作戦に参加させるという提案。

「しかし……旧式の護衛艦など態々加えた所で、戦力の足しになるとも思えんが」

「勿論、戦力を期待しての提案ではない。全軍の士気に関わる問題だ」

メッテ家に対する疑惑の追及については今暫らく控える事にするが、やはり講和派としてそれなりに名の通っていたメッテ家によるたった一隻での会戦参加については将兵達の間で色々と噂や話題になっており、問題視する声も少なく無い。

このまま後方支援任務で遊ばせておくよりも、攻勢作戦の先鋒に加えて活躍の場に立たせてやる事で疑惑の解消にも繋がり、他の講和派たちも今回の戦いに奮起するのではないか、という主張を展開する強硬派の提督。別の言い方をすれば、最前線に送り込むという事になるが。

「遊撃艦隊の速度について行けないのではないか？」

「いや、あの艦は確か高速船がベースだった筈。資料によれば、現役当時は最も速い艦ふねだったとか」

「彗星号シャークの名は伊達では無いという事か」

「では、支援部隊からメッテ家の護衛艦と他数隻を遊撃艦隊の指揮下に組み込むという事でよろしいですか」

特に反対の声も無く、今度こそ会議は終了した。

中央艦隊に向かう補給部隊の護衛を務めていた支援部隊に総司令部からの通達が下り、シャークヴィット号を含む護衛艦数隻は遊撃艦隊に合流してその指揮下に入るよう指示が出された。

「今度は遊撃艦隊か、先日の奇襲で受けたダメージの穴埋めかな？」

「どうでしょう……？ 戦力の補強が目的であれば、もっと他に――」

使える艦がある筈だと言い掛けて口を噤むミーシア副長。フェンナード艦長は肩を震わせながら笑いを堪えている。が、その直ぐ後

に送られてきた極秘作戦計画書の内容に表情を曇らせた。

膠着した現状を打破してクアブラ軍に攻勢を掛ける為、遊撃艦隊は先鋒となって敵主力艦隊に突貫を仕掛けるという作戦。

「後方宙域から全力航行で勢いをつけて、最大戦速のまま敵主力艦隊の中央を穿つ作戦だそうだよ」

「……また無茶な作戦を」

確かにこれなら足の遅いクアブラ軍艦隊の主力に大ダメージを与えられそうではあるが、遊撃艦隊もただでは済まない。多数の艦が敵艦との衝突で沈むのではないかと危惧するミーシア。

「まあ、遊撃艦隊は乗組員の殆どがクローン兵だそうだから、こういう強引な作戦でも通ったのかもね」

「クローン兵も出せない弱小家は途絶えても構わないという事ですか……」

はあと肩を落として溜め息を吐くミーシア。軍用のクローンは一般生活で使うクローンに比べて格段にコストが跳ね上がる。

特に仕官クラスにもなれば色々と手続きも面倒で、危険な戦場に出ない事によって身の安全を図れる代わりに経験の移植と学習に時間の大半を費やし、クローンの維持費にも大量の資金が費やされる。一握りの裕福層にしか真似の出来ないスタイルだ。

「副長はオリジナルなのかい？」

「私はオリジナルですよ。うちも決して裕福とはいえませんが」

「そうか、ならシユーハに戻った後もまた会う事が出来るね」

「……そう、ですね」

記憶や感情そのものは移植できない為、クローン体が絡む社会で

は人間関係も少々ややこしい状態になり易い。クローン体にはオリジナルが存在する以上、クローン体同士やクローン体とオリジナルが恋愛関係で結ばれるという例は稀だ。

「なんというか、面倒な世界に生きてるのね。ここの人達って」

剣と魔法の世界からの来訪者は、ブリッジでまたぞろ良い雰囲気になって見詰め合っている副長と艦長の様子を眺めながら、食堂で貰って来たブロック状の食事を齧ってた。

「美味しいけど、味気ない……」

ガジガジ。

第五話

支援部隊の一部と合流した遊撃艦隊は突貫の加速を得る為に後方の作戦宙域まで移動すると、艦列を揃えながら徐々に速度を増して行く。このまま加速を続けて約八時間後には最大戦速を維持したままクアブラ軍主力艦隊の上方から中央部へと突入し、反対側まで一気に抜ける。

「シャーヴィット、もし敵艦と衝突した場合、君の魔法シールドは耐えられるのかい？」

「うーん、どうかしらね。一応あたしの”守護”は異空間に逸らすやり方だから、基本的に質量は無視できると思うけど」

場合によっては衝突した敵艦がそのまま消失するという、この世界の常識で考えると傍目からは異常な光景が展開される事になるだろう。シャーヴィットの存在を隠蔽しておきたいフェンナード達にとっては、後でその辺りの説明を求められると色々困りそうだ。

「そうねー、少し弄っておくわ。ぶつかった時の衝撃が幾らか通っちゃうと思うけど、そのくらいは耐えられるでしょ？」

シャーヴィットの守護で船体を覆って敵からの攻撃や衝突などによる直接的な被害を防ぎ、その際に発生した衝撃はシャーヴィット号が元々搭載しているシールドで防ぐ。これで周囲の目も誤魔化せるだろうとブリッジで顔を寄せ合い密談する守護者と艦長に副長。

そこへ、通信士から遊撃艦隊の所属艦より艦長宛に通信が届いているとの報告がなされる。

「駆逐艦リローセより、艦長に繋いで欲しいとの事ですが」

「リローセ……ああ、もしかしてローズバッハ家の」

メッテ家と領地を隣するローズバッハ家にそういう名の艦があったと、出征前に見た艦艇リストの事を思い出したフェンナードは、回線を繋ぐよう指示を出す。まもなく、メインモニターに駆逐艦リローセの艦長が映し出された。

『御機嫌ようフェンナード子爵。貴方と肩を並べて戦場を駆ける日が来ようとは、夢にも思いませんでしたわ』

「貴女でしたか、パレスティーネ様」

気の強そうな瞳を凜と向ける軍服に身を包んだ令嬢。まだあどけなさも窺わせる歳若いパレスティーネは、フェンナードとは幼馴染的な関係でもある。フェンナードが商船運用を学んでいた頃から既に軍属として宇宙に出ていた彼女は、所謂強硬派に属する軍閥家の娘であった。

艦長同士の、子爵と令嬢の堅めな挨拶を無難に交わし合って儀礼を繕うと、パレスティーネはさっと態度を崩して凜とした瞳を興味深々に輝かせながら訪い掛ける。

『ねえ、あなたが御爺様の艦で参戦したのって、本当に抗議の意味だったの？』

「そんな訳ないじゃないか……船を買う余裕が無かったただだよ」

『だったら私に言えば援助してあげたのに。あなた、兵士達の間では噂になってるわよ？』

「どんな噂かは予想が付くよ」

この作戦に組み込まれたのもきつとその辺りが関係してるのだろうと、肩を竦めて見せるフェンナードに、パレスティーネは『とばつちりを受けた他の講和派は報われないわね』などと意地悪を言う。

「もしかしてソレを言う為に態々通信して来たのかい？」

『ふふつ それもあるけど、あなたの艦は私の部隊に配属される事になったから、突入後はしつかりついて来てね』

「え？ そんな通達は来てないけど」

『さっき会議で決まったばかりですもの』

ふふふんつ と何故か胸を張ってみせるパレスティーネ。駆逐艦の一艦長が遊撃艦隊の提督会議に参加出来た事を誇っているのだが、軍の内情に疎いフェンナードがその辺りの事を察せる筈もなく、かわりにミーシアが驚いていた。

『……まあいいわ、そういう所があなたなんですものね。ところで、何故ブリッジに軍医が？ 何処か具合でも悪いの？』

ふいに、白衣姿でブリッジの参謀席に座っている女性、シャールヴィットの存在を見つけて疑問に思ったパレスティーネが訪い掛けると、フェンナードは一瞬しまったという動揺を懷^{いだ}く。幼馴染^{だけ}であつてか、僅かな表情の変化に目聡く気が付くパレスティーネ。

『あらあ、聞いてはイケナイ事だったかしらあ？』

「いや、その……彼女はちょっと訳在りだね。極秘の任務というか怪しい者ではないんだが、ただの乗組員で軍医を任せているんだ」

「艦長……それでは意味が分かりません」

パレスティーネの爛々とした瞳に射竦められてしどろもどろになるフェンナード艦長に、ミーシア副長は『この人やっぱり嘘の付けない人だ』と、つくづく軍人向きではない事を認識しながらフォロ―にはいる。

話題にされている当の本人は『ん？ あたし？』といった雰囲気
で、キョトンとした表情を向けていた。

結局、シャールヴィットの事はメンタルな方面の顧問医師だと説明する事で、初めての戦場に緊張するフェンナードの為の処置であると誤解させて上手く誤魔化せた。

何だか年下の弟を見るような眼つきで母性溢れる視線を向けられてしまい、非常に遣る瀬無い想いをしたとはフェンナードの言である。

「全艦突入まで、0314、これより遊撃艦隊旗艦のコントロール
下に入ります」

全ての艦艇を同時に、効率的に運用する為の統合リンクシステムにより、遊撃艦隊の指揮下に属する艦の航行は全て旗艦によってコントロールされる。その間、各艦艇は攻撃や情報分析、ダメージの修復などに専念するのだ。

「うわー、アレに突っ込むの？ あの光点一つ一つがこの船より大きいよね？」

「敵の主力艦隊だからね。戦艦の数も多いし、クアブラの船は駆逐艦でもシユーハの巡洋艦くらいあるそうだよ」

艦長席の隣からメインモニターに映し出されている目標艦隊の光点群を眺めては息を吐くシャーヴィット。自分の知っている戦いとはあまりにも規模や性質が違い過ぎて、今ひとつ実感が沸かないでいるのだ。

そんな彼女の様子に、フエンナードは初めて会った時から感じていた違和感を覚えながらも、本作戦におけるこれからの行動について副長に説明を促した。頷いて今後の計画を述べるミーシア。

「突入後は各艦の所属する部隊規模での行動となり、当艦は先程の通信でお話したパレスティーネ艦長の指揮下に入ります」

「あの人もオリジナルとかクローンとかのどっちなのか？」

「どう……なんでしょう？ 私にはオリジナルに感じましたが」

「多分クローンの方だと思うよ？ 彼女の家はシューハでも有数の裕福な家系だし、何より両親からも大事にされてるからね」

こんな危険な作戦にオリジナルで参加させる筈が無いという。

『失礼ね！ こんな大事な会戦にクローンなんかで参戦する訳無いでしょっ 私はオリジナルよ！』

——と、いきなりメインモニターが切り替わり、ついさっき母性溢れる視線を向けて行った令嬢艦長が、自尊心溢れる瞳で睨みつけながらドアップで抗議を発してきた。通信士が申し訳なさそうに艦長席を振り返って強制割り込みだと告げる。

「ティーネ、盗み聞きは感心しないな」

『あゝら、何の事かしら？ 私の部隊に所属する艦ですもの、通信なんか繋ぎっ放しにしてるのは当然でしょ？』

通信士が困り笑いで振り返り、”それはないない”と顔の前で手を振った。

「しかし、よくご両親が了承したね」

『お父様はクローンが出ていると思ってるわ。』

「ええ！？ それは不味いんじゃないかな」

『大丈夫よ、さっきクローン兵の定期調整があったから、私のPSデーターがオリジナルになってる事も上に届いてる筈よ』

既に作戦は引き返せない段階まで進んでいるので今更呼び戻される心配も無い等と答えるパレスティーネに、それは全く問題の解決になっていないのではないかと汗を垂らすフェンナード。

『とにかく！ あなたはしっかり私の後ろについて来てくれればいいのっ もう直ぐ突入よ、覚悟を決めておく事ね』

パレスティーネはそう言って通信を切った。メインモニターには密集する無数の光点にクアブラ軍艦艇のシルエットが浮かび上がり始めている。暫し呆気にと取られていたフェンナードは、我に返ると傍らに立つ白衣の女性に振り返って訊ねた。

「シャーヴィット」

「なあに？」

「彼女の船も君の”魔法”で護る事は出来ないか？」
「むり」

バッサリ。シャーヴィット号に乗ったまま他の船にまで守護を及ばせるには、船体を完全に密着させるくらいでなければ力が届かな

いとシャーヴィットは説明する。

「そうか……それは難しいな」

作戦行動中の戦闘艦は常にシールドを展開しているので、味方の艦でもあまり船体を寄せ過ぎるとシールドの反撥で外装を破損したり、シールド自体にも出力に影響を及ぼしかねない。ましてやこれから突っ込む場所は敵主力艦隊のど真ん中なのだ。

どうしてもパレスティーンと彼女の艦を護りたいのなら、この船を盾にするしかない。

「ふふっ そっか、こんなに姿形が違っても、基本的に”ガルデ守護者”の役割と騎士の在り方は変わらないのね」

「？ どういう意味だい？」

シャーヴィットの居た所では、守護者は契約に従って騎士や砦に守護を与え、守護を受けた騎士達は守るべき者を護る為に守護を受けた自らの身を盾に剣を振るう。首を傾げているフェンナードに、シャーヴィットはニコニコと微笑みを返すのみであった。

上方宙域から急速接近してくる遊撃艦隊に対し、クアブラ軍の主力艦隊は左右に広がって迎撃態勢をとりつつ、遊撃艦隊の突入に連動してくるであろうシユーハ軍の動きを警戒する。

「敵艦隊の動きはどうか」

「敵右翼艦隊が敵中央艦隊よりやや距離を開きつつ前進中。左翼艦隊も同じく中央艦隊から距離を取っています」

「ふむ……」

クラブラ軍の艦隊司令官はシューハ軍が遊撃艦隊の突入による混乱に合わせて包囲陣を敷くと読み、その策を破るべく命令を下す。

「強襲艦隊を敵中央艦隊の後方へ飛ばせ」

「敵中央の後方ですか？ 突入してくる艦隊の迎撃ではなく？」

「そっちは”切り札”^{アレ}で迎え撃つ、射程内に入るまでは通り道を開けておけ。強襲艦隊にタイミングを合わせろ」

「なるほど、了解しました」

足の遅いクラブラ軍の艦艇は機動力で翻弄されると背後を突かれる等して各個撃破されやすいが、腰を据えての撃ち合いや乱戦になれば、防御力の差で優位に戦えるのだ。さらに、今回の会戦にはシューハ軍がまだ把握していないであろう切り札の存在があった。

「敵突入艦隊、戦闘宙域に侵入！」

「中央と左右の動きは？」

「動き出しました！ 閣下の読み通りです」

「よし、では全艦防御陣形で迎撃しつつ反撃の指示を待て」

双方の本隊が睨み合う形で膠着している戦闘宙域に入った遊撃艦隊は、最大戦速で完璧に足並みを揃えたままクアブラ軍主力艦隊に突入。統合リンクシステムによる旗艦のコントロールから離れた各艦は、予め決められていた部隊ごとに行動を開始した。

その動きに合わせて、シューハ軍の中央艦隊と左右の艦隊がクアブラ軍を包囲しに掛かる。遊撃艦隊の突入に浮き足立つクアブラ軍を、内と外からの挟撃にて一気に包囲殲滅するのが狙いだった。しかし――

「遊撃艦隊、第一、第二部隊消滅！」

「第三部隊、凡そ半数が轟沈！」

「なんだと！　そこまで火線は集中していなかった筈だ」

シューハ軍中央艦隊の指揮を執っていた提督は、いきなり有り得ないほど甚大な被害を被っている遊撃艦隊の戦況報告に、他の艦隊からの戦況データも照会して確認を取るよう指示を出す。

「クアブラ軍、中央の主力艦隊が前進して来ます！」

「敵両翼の艦隊もこちらに向かって前進を始めました！」

「いかん……いかんぞっ　これでは我々の方が先に包囲されてしまう」

クアブラ軍の全軍によるシューハ軍中央艦隊への前進は、突入して来た遊撃艦隊に背後から攻撃される危険性を全く無視した行動だが、肝心の遊撃艦隊は突入直後に受けた大打撃によって混乱しており、組織的な活動が出来ず攻撃部隊として機能していない状態にあった。

「っ！ 偵察艦より入電、後方宙域に艦影多数確認！ クアブラの強襲艦隊です！」

「艦隊総司令部からの連絡は？」

「通信妨害により連絡が取れません。ですが、各空母から戦闘機の発艦が確認されています」

「そうか……なんとか持ち堪えてくれれば良いが。全軍に通達！」

中央艦隊は敵主力艦隊を攻撃しつつ後退、左翼艦隊は斬り込んで敵艦隊の合流を防げ！ 右翼艦隊は直ちに転進、艦隊総司令部へ急行せよ！」

作戦の裏を突かれて総司令部が危険に晒されてしまったシューハ軍はじりじりと後退を始め、クアブラ軍は主力艦隊がシューハの中央艦隊に攻勢を掛けて戦線を押し上げつつ、両翼艦隊の片方がその背後を固めて防御陣を敷く。

もう片方の艦隊はその場から取って返して、後方に取り残されている遊撃艦隊の掃討に向かった。

少し前までクアブラ軍の主力艦隊が陣取っていた宙域では、殆ど壊滅状態にまで陥っている遊撃艦隊の生き残った部隊が、他の部隊と連絡を取りつつどうにか態勢を立て直そうと試みていた。

「船の被害状況――は特に無いみたいだから後回しで、味方の状況はどうなっている」

「現在、中央艦隊はクアブラ軍主力艦隊と交戦しながら後退中！ 後方で艦隊総司令部の空母群が強襲艦隊に攻撃を受けているようで

す」

「遊撃艦隊の各部隊は」

「突入直後の攻撃と思われる光で半数以上が脱落、第三部隊は戦闘続行不能、第四部隊は指揮艦が応答無し、健在が確認された部隊は第五、第六部隊のみです」

シャーヴィット号の所属する第六部隊は指揮艦である駆逐艦リローセが健在で、各艦の状況を確かめるべく情報収集をしながら第五部隊に連絡を打診しているようだ。この惨状を見る限り、突入作戦は完全に失敗したと言える。

次々と入ってくる情報を処理しながら、ミーシア副長は遊撃艦隊を壊滅させた光の事を口にした。

「しかし、さっきの光は一体……クアブラ軍の新兵器か何かでしようか？」

「かもしれないね。強襲艦隊といい、クアブラも戦い方を変えて来てるんだと思うよ」

今までクアブラ軍の主力兵器といえば大量のミサイルが定石で、硬い装甲を持つ戦艦が防御力にモノをいわせて攻撃に耐えながら弾幕の如くばら撒くという戦術をとっていた。シューハ軍の艦艇は機動力と着弾の早いレーザー兵器を駆使してそれらの戦術に対抗して来たのだ。

先程の突入直後に遊撃艦隊を襲った光は、強力なレーザー兵器の類かと思われる。

『フェンナード！ まだ生きてるわよね？』

「見ての通りだよ、こっちは皆無事だ」

駆逐艦リローセから繋がれた通信により、メインモニターの端に開いたウィンドウにパレスティーナの顔が映し出された。何処かにぶつけたのか、オデコの右側辺りに応急処置用の止血シールが貼られており、若干血が滲んでいる。

『意外に落ち着いてるのね、見直したわよ？　とりあえず、私達は一刻も早くこの宙域から脱出しなくてはならないわ』

「賛成だね。さっきの攻撃は気になるけど、調べてる余裕はなさそうだし」

『そうね……先頭集団にいた第三部隊の話だと、光が来る直前にリーダーが何か巨大な物体を捉えたそうよ』

「巨大な物体……密集した空母や艦群の影じゃなく？」

『多分、要塞とか巨大砲台の類じゃないかと睨んでるわ。何とか詳しい情報を持ち帰って分析と対策を――』

その時、駆逐艦リローセの艦橋に敵の接近を告げる警報が鳴り響いた。搭載されているリーダーの索敵範囲の関係で、シャーヴィツト号のブリッジにも少し遅れて敵艦接近の警告アナウンスが流れる。

現在、遊撃艦隊は旗艦を含めた第一、第二部隊が消滅し、第三部隊は航行不能艦から乗組員を救助中。第四部隊は指揮艦が被弾して艦長が重傷を負ったらしく不在な為、第五部隊と共に第六部隊の指揮下に入っている。事実上、パレスティーナが遊撃艦隊の総指揮を担っていた。

『第四部隊は第三部隊の乗組員收容が済み次第、直ちに離脱を開始。それまで第五部隊と私達で敵を惹き付けておくわ』

迅速に方針を固めたパレスティナは各部隊に指示を出して戦闘準備を告げると、フェンナードにちらりと視線を向ける。

『しっかり付いて来てね』

「ああ——了解した」

表情を引き締めたフェンナードは、頷いて答えた。

第六話

遊撃艦隊の第五、第六部隊は駆逐艦リローセを指揮艦とし、パレストイーネ艦長の指揮の下、クアブラ軍の右翼艦隊と対峙する。通常編成の一個艦隊約1000隻のクアブラ艦隊に対して、パレストイーネの率いる遊撃艦隊は第五、第六部隊の戦闘艦を合わせて凡そ250隻。

しかも大半が駆逐艦以下の護衛艦で構成されている。数も火力も劣っているが、唯一の強みは小型艦の持つ機動力だ。

『現在は統合リンクシステムによる管制航行が使えません。従って、作戦の成否は各艦の操舵手による操艦技術に掛かっています』

遊撃艦隊の全艦に送られたパレストイーネ艦長の考案する作戦概要と説明が、シャーヴィット号のメインモニター上にも流されている。

彼女の考案した作戦は、出来るだけ敵を惹き付けて救出作業中の第四部隊がいる宙域から引き離し、第四部隊の離脱に合わせてシュールハ軍本隊のいる宙域へ撤退を図るというシンプルな内容。

統合リンクシステムが使えない以上、四作戦に参加する各艦艇はそれぞれの判断で行動する事になる為、密集した状態での航行は味方艦との衝突を起こす危険性も高くなるが、そこは小回りの利く小型艦。駆逐艦や護衛艦乗り達の本領が発揮されるところであった。

遊撃艦隊の掃討に來たクアブラ軍の右翼艦隊は、前方より接近する少数艦隊をレーダーに捉えて臨戦態勢に入るが、この宙域の更に奥辺りで留まっている艦艇群を見つけた事で艦隊の指揮を執る提督は暫し思案する。

敵艦識別の結果、接近中の艦艇群はシューハ軍遊撃艦隊の第五部隊と第六部隊。奥で留まっているのは第三部隊と第四部隊のようだ。

「敵は小型艦ばかりか……」

「はい、シューハの遊撃艦隊は機動力を活かした後方攪乱などの作戦に多く参加していたようです」

「ふむ……小艦としてシューハの高機動戦法は侮れんな、ここは一計を案ずるとしよう。要塞砲の支援を要請しろ」

「了解。要塞砲に支援要請————要塞砲より回答、次の発射可能時間まで、0064」

クアブラ軍の切り札、超大型要塞付長距離支援砲。補給基地等として使われる宇宙要塞に巨大砲台を取り付けた、というよりも、巨大砲台に要塞を設置したような造りの大型支援砲で、一回の砲撃に駆逐艦一隻分ほどのエネルギー鉱石を弾として消費するモンスター兵器。

一度撃つと反動でかなりの距離を流される事に加えて、砲身部分の内壁が高熱に耐えきれず溶けてしまう為、その都度換装しなくてはならない燃費の悪さを誇る。砲撃後、元の位置まで移動用ブースターを使って戻ってくる間に、次弾の装填と砲身内壁の換装を済ませるのだ。

「良いタイミングになりそうだな、全艦、敵第四部隊に向けて前進。後ろから突付かれないうしっかり弾幕を張って行け」

駆逐艦リローセの艦橋にて、クアブラ軍艦隊の動きを追っていたレーダー手が警告を発する。

「クアブラ艦隊が進路を変えました！ 第三、第四部隊に向かっている模様！」

「なんですって！？」

第五部隊の指揮艦と連絡を取り合いながらクアブラ軍艦隊を如何に安全且つ迅速に誘導するかという意見を取り交わしていたパレスティーネは、その報告でモニター上に映し出される進路予測を見て呻いた。

こちらの意図を読まれたか、或いは第四部隊に指揮系統の中心があると睨んだのか、クアブラ艦隊の攻撃目標が第四部隊に向けられた今、第五、第六部隊はこのまま離脱すれば確実に本隊まで脱出できる。しかし、パレスティーネの指揮に味方を見捨てて逃げる選択肢は無い。

「全艦に通達、敵艦隊の左舷後方より攻撃開始、砲が届かなくても構わないから近付き過ぎないように挑発して！」

前進するクアブラ艦隊の前方を横切り、艦隊左舷後方に回り込んだ第五、第六部隊は照準レーザーを照射して気を引こうとするも、弾幕のようにミサイルをばら撒きながら突き進むクアブラ艦隊は、微妙に進路をずらしながら真つ直ぐ第四部隊へ向かっていく。

「第三、第四部隊が敵艦隊の射程に入るまで、距離200を切りました！」

「く……駄目だわ、このままじゃ」

誘導する為の挑発行動に効果が無い事を悟ったパレスティーネ艦長は、直接戦闘の決断を下した。

クアブラ軍右翼艦隊を指揮する提督はパレスティーネの策を読みきっていた訳ではなかったのだが、第三、第四部隊を狙う事で結果的にその策を破り、逆に第五、第六部隊を惹き付けて誘導する事に成功していた。

「敵少数艦隊が速度を上げました、攻撃目標の部隊と合流するつもりようです」

「我々の前方へ割り込んで来るようなら、速度を落として割り込ませろ。要塞砲の準備が整い次第、全艦散開だ。巻き込まれるなよ」

艦橋正面モニターの端に要塞砲の砲撃カウントダウンが表示される。

「これは一網打尽だな」

どうやら経験の浅い指揮官か、大を生かす為に小を切り捨てる事の出来ない者が指揮を執っているようだ、敵少数艦隊の指揮官に当たりをつけた提督は、存外楽な任務に終わりそうな事をほくそえんだ。

護衛艦シャーヴィット号のブリッジでは、こんな状況にも関わらず参謀席で異文明のお茶など楽しみながらノンビリと戦況を窺っていたシャーヴィットが、不意に立ち上がって後ろを振り返り、じつと何かを見詰めるような仕草を見せていた。

傍目からはブリッジの壁をじいっと見詰めているようにしか見えないので、捉え様によっては凄く不気味だ。こういう時、声を掛けるのは暗黙の了解でフェンナードの役目になっている。

「シャーヴィット、どうかしたのかい？」

声を掛けられたシャーヴィットは、徐にフェンナード艦長へ向き直ると警告を発した。

「……さっきの光が来るわ。このままじゃ本当に帰れなくなっちゃうわね……」

「さっきの光？」

「後方宙域に巨大物体！ 高エネルギー反応を検出！」

レーダー手の声に、フェンナードはメインモニターを振り返る。遊撃艦隊を一瞬で壊滅に追いやったレーザー兵器と思われる光。

その攻撃を受ける直前、艦隊の前列にいた第三部隊がレーダーの端に捉えたという巨大物体。要塞か何かではないかと推測されていた巨大建造物と思しき影が、第六部隊の最後尾を行くシャーヴィット号のレーダーに捉えられた。すぐさまミーシア副長が補佐に動く。

「艦長！ 直ぐに座標データと映像を確認して各艦に回しましょう、駆逐艦や偵察艦の設備なら分析も早く出せると思います」

「わかった、そうしてくれ」

フェンナード艦長の許可でミーシア副長の指示は直ちに実行され、巨大建造物のデータが全艦に発信される。

現在、状況は第三、第四部隊の救援に向かう第五、第六部隊が小型艦の機動力を活かしてクアブラ艦隊を追い越し、足止め狙いに進路上へ割り込もうとしている所であった。

「シャーヴィット、君が今言った光とはこの――シャーヴィット？」

フェンナードが巨大建造物と”光”との関係について訊ねようとシャーヴィットに視線を戻した時、彼女は両手を胸の辺りに重ねて祈るような体勢を取りながら、一歩ずつゆっくりとブリッジのフロアへ歩み出す。

何か神秘性を感じさせる雰囲気、暫し状況と仕事を忘れるクルー達。そうしてブリッジの真ん中辺りまで来たシャーヴィットの身体が、仄かな光を纏い始めた。

「フェンナード艦長」

「な、なんだい？」

「正式な契約にはならないけど状況が状況だからね——」^{ガルデ}「守護者」
規定の超法規的処置を適応し、^{これ}是よりあなたを私の守護対象とします」

そう宣言したシャーヴィットは身体から満ち溢れる守護の光をとき放つように両手を広げると、^{ガルデ}”守護者”の力を開放した。何者にも侵されない絶対防御のオーラがブリッジを中心に広がっていく。

丁度その時、クアブラ軍の右翼艦隊が要塞砲の砲撃範囲から一時的に離脱を図るため、一気に散開。

シャーヴィット号よりもたらされていたデーターでクアブラ艦隊の動きの意味に気付いたパレスティーネが全艦に緊急回避を呼び掛けたのと、シャーヴィット号が青白い守護の光に包み込まれたのは同時だった。

白い光の柱が宙域を横断して行く。戦艦に搭載されている対艦レーザーの1200倍近い出力に4倍程の射程。その範囲内にある対象物は尽く融解し、蒸発してしまう。要塞砲の光に貫かれた艦艇群にはポツカリと穿たれたような穴を思わせる空間が開いていた。

遊撃艦隊の第四部隊と第三部隊が消滅。第五部隊と第六部隊の艦艇も何隻か巻き込まれ、致命的な損傷を受けた艦が通り過ぎていった光に数瞬遅れて爆発の炎に包まれる。

「艦長！ パレスティーネ艦長！ ご無事ですか！」

「ええ……私は大丈夫。各艦、被害状況の報告を……」

強かに打ち付けた身体を引き摺りながら艦長席に這い上がったパレステイーネは、艦橋の惨状に言葉を失った。

「なんて、こと……」

要塞砲の砲撃は辛くも避けられたものの、爆発に煽られた味方艦との衝突で小破した駆逐艦リローセの艦橋は左側オペレーター席が全壊。

幸い衝撃で席から弾き飛ばされていたオペレーター達は怪我だけで済んだようだが、ノイズだらけのメインモニターに映るクアブラ艦隊は散開状態から悠々と再集結を果たし、艦隊陣形を整え始めている。

「っ！ 本隊から入電！」

「通信が繋がったの？ なら援軍を――」

「そ、それが……緊急回線を使った発信のみで、遊撃艦隊の残存戦力は直ちに艦隊総司令部の援護に向かえと……」

「……」

肩を落として艦長席に身を沈めるパレステイーネ。小さく息を吐き、気合いを込めて顔を上げた彼女は、把握できる限りの被害状況報告と、連絡の取れる味方艦に通信を繋ぐよう指示をだした。

フワフワと浮かび上がる幻想的な光の粒。守護の力に包まれたシ

ヤーヴィット号のブリッジでは、先程の砲撃が掠めたにも関わらず被害ゼロだった事よりも、シャーヴィットの纏う神懸かった気配に圧倒されて誰もが口を開けずにいた。

この存在はなんだろう？ そんな疑問を懐いたフェンナードの心に答えるように、浮かび上がった一つのイメージ。

「守護者……」

ポツリと呟いたフェンナードの言葉で、凍り付いていたブリッジの時が動き始める。我に返ったミーシア副長は、先程から緊急回線でコールを続けている駆逐艦リローセからの通信をメインモニターに繋ぐよう指示を出し、通信士は慌てて回線を繋ぐ。

『……繋がった！ フェンナード、無事？』

「あ、ああ、こっちは無事だ。映像が繋がらないみたいだけど、そこちは大丈夫なのかい？」

『あまり大丈夫とはいえないわね、艦もそうだけど戦況も酷い有り様だわ』

「さっき本隊からの片道通信があったね。どうする？」

どうしようも無い事は分かっているが、生き残った艦だけでも何とか脱出して本隊に合流しなくてはと話すパレスティーネ。流石に憔悴しているらしく声に覇気がない。映像が無くとも相当に顔色も悪いであろう事が窺えた。

「クアブラ艦隊接近！ 敵戦艦の有効射程まであと80！」

幻想的な光の粒が舞うブリッジにて、レーダー手より非情な現実が告げられる。通信の向こうからもリローセのオペレーターが同じ

報告を上げているのが聞こえる。他の艦からも通信が入っているらしく、パレスティーネはそちらへも指示を出したりと対応に追われていた。

恐らく生き残った艦は100隻にも満たないだろう。無傷の艦はこのシャーヴィット号くらいであると思われる。敵艦隊の接近でノイズが酷くなり始めた通信の向こうにパレスティーネ艦長の奮闘している声を聞きながら、フェンナードは深く溜め息を吐いた。

ややもすれば身体中の力が抜けてしまいそうになりながら艦長席に身を預けると、ブリッジの真ん中で淡い光を放ち続け、そこだけ別世界のような不思議な光景をつくり出しているシャーヴィットに声を掛ける。

「シャーヴィット」

「なあに？」

振り返らず、背中越しに答えるシャーヴィット。フェンナードは俯いたまま言葉を続ける。

「なんとか出来ないかな？」

「なんとかするのが、あなたの仕事でしょ？」

「この船の武装だけじゃどうにもならない」

「そう？ 戦いの前に決心してたんじゃないの？」

護りの奇跡を見せている守護者は、弱気なフェンナードの言葉に普段と変わらない調子でそう返す。俯き加減だったフェンナードは、少し顔を上げると、何の事かと首を傾げた。

「決心？ 何を？」

「護る為にこの船を盾にするって、考えてたでしょ」

「それは、しかし……盾にしたからと言って——いや、いけるのか？」

何とかパレスティーネ嬢を護らなくてはと考えていた時の心を読まれた事よりも、ある一つの閃きにフェンナードの瞳が揺れる。たった今思い付いた”上手いやり方”は、果たして実行可能なのか。いや、実現可能なのか。

「あたしは守護者^{ガルデ}。契約した者に絶対の守護を与えるのがあたし達の役割」

ずっと祈りの構えから両腕を広げて見せるシャーヴィット。彼女から溢れ出した光が、船全体に広がっていく。船体を包み込む守護の光。

——魔法。

フェンナードはようやく彼女の言った言葉の意味を理解し、その力を信じてみる事にした。

「……副長」

「はい」

「これより、本艦は単独行動に入る」

「はい？」

隣で小首を傾げて戸惑いの表情を向けてくるミーシア副長に微笑みを返したフェンナード艦長は、リローセと通信が繋がっている今

の内にパレスティーネ艦長にもメッセージを伝えておく。通信状態が悪く映像も映らずノイズだらけだが、どうにか会話は出来た。

『どうしたの、フェンナード？ もう直ぐそこまで敵艦隊が迫っているわ、貴方も早く脱出しないと――』

「パレスティーネ、もし独断専行で僕が軍法会議に問われたら、君に弁護して欲しい」

『何を、言ってるの……？』

「敵戦艦より照準レーザーの照射を確認！」

メインモニターには目前まで迫ったクアブラ軍の右翼艦隊をバツクに、数隻の重甲戦艦が手柄を競ってか突出する姿が映し出されている。フェンナードはこちらからも照準レーザーを照射して相手の位置情報を捉えるよう指示を出した。

「じゃあ僕は行くよ、上手く脱出してくれ。パレスティーネ達の無事を祈っている」

『待ちなさいフェンナード！ あなた何をするつもりなの！？ フエン――』

パレスティーネとの通信を終えたフェンナードは艦長席に座り直す、この船に乗艦して初めての号令を発した。

「シャーヴィット号、全速前進！」

クアブラ軍の誇る重甲戦艦、その艦橋では、ほぼ確定した勝利に昂揚するクルー達^{こうよう}が自分達に照準レーザーを照射し返してきたシューハ軍の小さな護衛艦にやんやの喝采を送っていた。

素晴らしい闘争心だと褒め称え、立派な戦闘艦乗りにはこちらも礼を尽くして全力で宇宙の藻屑に屠ってやらねばと、艦長のおどけるような言い回しにクルー達の笑い声上がる。

「敵護衛艦が一隻、真っ直ぐこちらへ突っ込んできます」

「ほう！ たった一艦で玉砕覚悟の特攻か。では我が軍特性のミサイルとレーザーで出迎えてやろう」

「了解しました。ミサイル発射準備11番から18番、対艦レーザー砲用意、目標、前方敵護衛艦に固定、攻撃準備よし」

「撃てえ！」

重甲戦艦より撃ち出されたミサイルが次々とシャーヴィット号に殺到し、タイミングを合わせて対艦レーザーが放たれる。過剰に撃ち込まれたミサイルによって膨れ上がった爆発の閃光は、空母でも撃沈したかのように派手な炎を吹き上げた。

凄まじい撃沈ショーに、おおーつと歓声があがる。――が、レーザー手があれっ？ と顔色を変えた。

「まって下さい、敵艦健在！」

「なに？」

正面モニターに映し出されている爆発の向こうから現われる青白いシールド光に包まれた護衛艦の姿。一瞬、驚きに言葉を詰まらせた重甲戦艦の艦長だったが、シューハの小型艦が持つ機動力には目

を見張るものがある。

ミサイルが命中する直前に急加速で切り抜けたのかもしれないと推測した艦長は、対艦レーザーで仕留めるよう指示を出した。

「対艦レーザー、砲撃開始。1番、2番、4番、6番、8番命中……こ、効果ありません！」

「なんだと、そんな馬鹿な事が……いや、ホログラムによるダミーか！？ レーダー手、本体を探せ」

「い、いえ、照準レーザーの照射が有効ですので、アレはホログラムではありません」

「敵艦、尚も接近！ このままだと本艦に激突します！」

目前に迫る重甲戦艦のシールド波に干渉され、シャーヴィット号ブリッジのメインモニターは激しく映像を乱される。無数のミサイルが至近距離で爆発した影響でレーダーも暫らく使い物にならない。

「ブリッジの防壁シャッターを下ろせ、ここからはモニター映像は使えない、有視界航行準備」

「ええっ ブリッジの防壁を……？ り、了解、有視界航行に入ります！」

戦闘艦のブリッジには一応窓も付けられてはいるが、窓としての本来の用途で使われる事は殆どない。旧式艦のシャーヴィット号は現在の艦と比べて窓の幅も広く、戦闘中にここを護る防壁を下ろすなど自殺行為に等しいのだが、フェンナードには大丈夫だという確信があった。

守護者シャーヴィットに護られている限り、この艦にはどんな攻撃も通用しないと。やがて防壁が下ろされ、ブリッジの窓から無数の星々に混じったクアブラ艦隊の航行灯と、重甲戦艦の無骨な船首甲板部分が正面に見えた。

「て、敵重甲戦艦の真正面にいます！」

「よし、敵戦艦に突っ込め」

「敵戦艦につ——え、えええっ！」

「か、艦長？」

復唱し掛けて何かとんでもない指示が下った事に気が付き、驚きの声を上げる操舵手。流石にその命令はどうかと思ったミーシアがフェンナードの様子を窺うも、フェンナード艦長は毅然とした態度でブリッジの窓から見えるクアブラ艦隊の影に視線を向けていた。

「大丈夫だ、この艦は沈まない。そうなんだろう？ シャーヴィット」

「勿論よ、あたしが護ってるんだもの」

ブリッジの真ん中で守護の光を放ち続けるシャーヴィットの姿に、ハツとなるクルー達。先程のミサイル攻撃もその後のレーザー攻撃も、その前の攻撃も、彼女が現われてからここに至るまで、敵軍から受けた致命的な攻撃は全て防がれている。

もはやここまでくれば見なかった事には出来ない。彼女の見せる不可思議な現象と、尽く攻撃を防ぎ続けている現実との関連を否定する事は出来ない。彼女の言う魔法の力、”守護者^{ガルデ}”という存在に護られている事を受け入れざるを得なかった。

「我が艦の武装では敵に大したダメージを与えられない。だから、この守護の力をそのまま攻撃の力に回す。行け、突撃だ」

「り、了解しました！ 敵戦艦に突撃します！」

みるみる内に迫る重甲戦艦の厚そうな装甲。両端に並んだ点滅する航行灯が通り過ぎ、やがて甲板に激突。ぶつけた衝撃で多少揺れるも、守護の力に護られたシャーヴィット号は船体やエンジンに異常を出す事もなくガリガリと甲板を削りながら突き進む。

ミサイルを大量に積載している重甲戦艦はシャーヴィット号がぶつけて削った場所から誘爆を起こしてしまい、たちまち炎に包まれた。

「馬鹿者が……っ たかが小艦一隻と侮るからだ！」

クアブラ軍右翼艦隊の指揮官である提督は、突出していた重甲戦艦がシューハ軍護衛艦の特攻攻撃を受けて爆沈する様に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら悪態をついた。

幾ら重厚な装甲を誇る重甲戦艦といえど、護衛艦のようなサイズ
の艦に全力の体当たりを許せば、大型ミサイルでも撃ち込まれたの
と同等の被害を負うであろう事くらいは少し考えれば分かるだろう
にと、憤懣やる方ない提督。

「しかしまあ……ここはシューハの護衛艦が見せた勇敢な自己犠牲
精神を称えておく事にするか」

あの艦が飛び出してきた宙域には遊撃艦隊の生き残りと思しき1
00隻にも満たない艦艇群が、この宙域からの離脱を図ろうと脱出
を試みている姿を捉えてある。やはり目標が小さく素早かったせい
か、要塞砲を使った割りに半分近くも撃ち漏らしてしまったようだ。

彼等を逃がす為に特攻を決意したのであろう護衛艦の艦長には悪いが、この宙域に残ったシューハ軍艦艇は全て沈めて掃討を完了させる。クアブラ艦隊の提督は戦艦を一隻撃沈された事の溜飲をそれで下げる事にした。

動けない艦は作業用アームやワイヤー等で繋いで曳航しながら、生き残った艦と乗組員を連れて脱出を図る遊撃艦隊の第六部隊。

その指揮艦である駆逐艦リローセの半壊した艦橋にて、メインモニターに映し出される重甲戦艦の爆沈と、その炎に消えていった幼馴染の乗る旧式護衛艦の姿に、パレスティーネは力なく呟きをこぼす。

「なんてことを……………フエンナード」

やっと自分を頼ってくれたと思った。弁護を頼みたいなどと言っておきながら、先に逝ってしまうとは何事かと文句を言いに行きたくなるパレスティーネ。しかし、今は嘆いてばかりもいられない。敵艦隊はまだこちらを狙っているのだ。

「照準レーザーの照射を確認！ 間もなく敵艦隊の射程に入ります！」

「く…………… 補助ブラスターも姿勢制御スラスターも全て使って回避行動！ 艦載機のエンジンも使えるなら推進力に回しなさい！」

必死に逃げる遊撃艦隊の残存部隊にクアブラ艦隊の先頭に行く巡洋艦がレーザー砲を発射しようとしたその時、突然大きくバランス

を崩したその艦は、横向きになった船体で味方の射線を塞いでしまう。危うく衝突しそうになり、全艦に急制動を掛けるクアブラ艦隊。統合リンクシステムのような管制航行の制御がなければ、玉突きを起こして大惨事に至る所であった。

「敵艦隊停止！ 先頭の艦で何かトラブルがあったようです」
「チャンスだわ、今の内に出来るだけ距離を――」

「これは……っ 味方艦の反応、シャーヴィット号です！」
「――っ！」

横向きになってしまった巡洋艦に何をやってるんだと抗議の通信が飛ばされるなか、件の艦からは後続艦にぶつけられたのだと逆に抗議を訴える通信が返される。が、それらの通信は次に起きた出来事によって吹き飛んだ。

横向きになっていた巡洋艦の隣にいた戦艦が、まるで逆立ちでもするかのように、突然縦向きに姿勢を崩した。その戦艦の後部船底に突き刺さっている何か。淡い光を放つそれは、逆噴射で軌跡の帯を引きながら船底から抜け出すと、艦首を周囲の手近な艦へと向ける。

「て、敵艦反応！ さっきの護衛艦です！」
「なんだと！」

その護衛艦は適当な標的を見つけると小型艦ならではの急加速で体当たり攻撃を敢行、ぶちかましてはその艦を踏み台にして次の艦へと飛び掛かる。宇宙船は基本的に精密部品の塊だ。例えば戦闘艦で

あってもそれは変わらない。

いくら厚い装甲やシールドで護られているからといっても、直接数百トン近い質量を持つ船体をぶつけて来られては、戦艦とて堪ったモノではないのだ。当たり所が悪ければ豊富な弾薬が誘爆を起こして、最初に爆沈した重甲戦艦のような事になってしまう。

「もしや……あれが強襲艦隊の報告にあつた例の実験艦か？」

次々と艦隊前列の艦に体当たりを仕掛けては、バランスを崩させて艦列を滅茶苦茶に引つ掻き回し、進軍を阻む見た目は旧式護衛艦の姿にクアブラ軍艦隊の提督は戦慄する。レーザーも効かない、ミサイルも効かない、戦艦と衝突してもまるで堪えた様子がみられない。

「冗談ではないぞ……あんな出鱈目な艦ふねがあつてたまるか！」

艦橋の正面モニターに映し出される己が艦隊の惨状を見ながら、提督は納得いかぬとマイクの付いたコンソールテーブルを叩き、叫んだ。

第七話

体当たり攻撃でクアブラ軍の右翼艦隊を翻弄するシャーヴィット号は、遊撃艦隊の残存部隊がこの宙域から離脱して十分に距離を取った事を確認すると、仕上げとして空母に狙いを定めた。

現在はクアブラ軍の戦闘機も出撃してシャーヴィット号を仕留めようと周りを飛び回っているの、空母のカタパルトや格納庫を狙って離着艦を妨げ、少しでも多く艦隊がこの場から動けない要素を作り出す。

これまでにぶつけて小破から中破させた艦は戦艦やら巡洋艦、駆逐艦のほか、通常は艦隊群の内側で他の艦に護られている砲艦や補給艦の類まで手当たり次第、それも撃沈に至るような大破を負わず、応急処置で動ける程度の壊し方に留めている。

完全に沈めてしまうよりも、中途半端に破損させておいた方が乗組員の救助やら船体の修理などで足止めになるからだ。

「おい、敵艦がここに突っ込んでくるらしいぞ！ 全員退避しろってよ」

警報が鳴り響くクアブラ軍空母のカタパルトデッキ脇で整備士の集団と屯している戦闘機のパイロット達。格納庫の戦況モニターに

は戦闘の様子も映されておらず、この警報は何時止むのかと話している所へ、上のブロックから作業員が避難を呼びかけた。

「突っ込んでくるって……シューハの連中、追い詰められてとち狂ったのか？」

「昔の我が軍じゃあるまいし」

「いや、何でも特殊な接近戦用のシールドを搭載した新型艦が一隻だけで暴れまわってるらしいぞ」

「なんだそりゃ？」

作業員の話^{しふか}を訝しむ彼等だったが、退避命令が出ているなら速やかに移動しなくてはなるまいと上のブロックへ移動を始める。と、その時――ズシンという大きな音が響いたかと思うと、揺れと共に衝撃が格納庫を駆け抜けた。

そしてメキメキとカタパルトハッチを突き破って侵入してくるシューハ軍の護衛艦。発進位置に運ぶ為のルール上に並べられていた戦闘機が次々と薙ぎ倒される。

「うわっ やばい！」

「マジで突っ込んできやがった！」

「手摺りか何かに掴まれっ 吸い出されるぞ！」

「おい、あれ見ろよ！」

逆噴射で戻っていく護衛艦のブリッジと思われる部分に窓の明かり。通常、そういう場所は防壁で覆われている筈なのだが、この艦は堂々と窓から周囲の状況を窺っている乗組員の姿が見える。そしてそのブリッジの中央付近に、ちらりと見えた奇妙な光景。

「なんだ、あれは……？」

突入していた護衛艦が出て行くと大穴の空いた格納庫は緊急隔壁が下り始め、このブロックを閉鎖する趣の警報とアナウンスが鳴り響く。

近くのブロックに避難する整備士や作業員、パイロット達で先程の艦のブリッジを見た者は、ちらつと見えた奇妙なものについて幻覚では無い事を確かめる為に、互いに見たものを話し合う。

「女だったよな？」

「ああ、なんか身体が光ってたような……」

「俺も見た。何だかあの艦のシールドと連動してたように感じたが」「シューハの事だから、オペレーター能力に特化させた人間コンピュータとかかもしれないぞ？」

クローン兵や治療機器にみるシューハの生体技術と生命に対する倫理観の特異さはクアブラでも広く知れ渡っている。あまり公にはされていないが、シューハからの亡命者の中にはクローン兵なども結構いたりするのだ。

一般のクローンに比べてオリジナルと遜色ない高度な思考を行なえる軍属のクローンにはある程度の思考制御が課せられているのだが、クローンの状態などを管理しているシステムの圏外に出てしまえば思考制御が外れ、より自らの意思に添った行動をし始めるようになる。

そうして様々なケースでクアブラに亡命したクローン達から技術や情報の提供を受けた事で、堅艦物量一辺倒だったクアブラ軍は戦術や戦略に幅を持ち、役割に合わせた艦の建造、運用を行なえるようになった。今回の会戦での優勢はその成果を表していた。

「敵護衛艦！ 宙域より離脱していきます！」

「うぬう……被害状況と艦隊の再編に掛かる時間を報告せよ」

シューハ軍の遊撃艦隊に潜んでいた見た目こそ旧式の護衛艦、その実とんでもない性能を誇る新型シールドを搭載した実験艦と思しき艦は、最初に重甲戦艦を爆沈させて葬った後、たった一隻でクアブラ軍右翼艦隊を翻弄し続け、戦艦82隻、巡洋艦103隻、駆逐艦120隻、空母2隻、その他小型艦や戦闘機を含め多数を小破から中破させて離脱していった。

無傷の艦を手早く編成すれば追撃も可能だが、己が艦隊の惨状に呻く提督はともそんな危険を冒す気にはなれない。

「戦闘可能な段階まで修復して再編制するには、急いでも二日以上は掛かるかと……要塞砲整備部隊の支援があれば半日でなんとか」

「半日か……沈んだ艦が戦艦一隻のみだったのは不幸中の幸いだな。要塞砲の整備部隊に応援要請を出せ、本隊に連絡後、移動する」

疲れた表情で指示を出した提督は、深く息を吐いて艦長席に身を預けた。

シューハ軍の中央艦隊はクアブラの主力艦隊と左翼艦隊の攻勢に曝され、艦隊総司令部のある空母群の宙域まで押し込まれていた。

特にクアブラの強襲艦隊は神出鬼没で、シューハの右翼艦隊が総司令部の援護に駆けつけた時には既にその宙域からレーダーの索敵範囲外まで移動しており、クアブラの主力艦隊と対峙していた中央艦隊の左舷後方を突いてくるなどシューハ軍を翻弄し続けた。

現在は艦隊総司令部の空母群を中心に中央艦隊、左翼艦隊、右翼艦隊で三方を護り、クアブラの主力艦隊と左翼艦隊の攻勢に耐えながら強襲艦隊の奇襲に警戒している状況。

表面的には艦隊戦で正面からやり合っているような構図だが、本丸である艦隊総司令部を背にして後が無いシューハ軍は心理面から実質的に包囲されているような形だ。

クアブラ軍主力艦隊の旗艦で総指揮を執る艦隊司令官は、後方宙域の掃討に行かせた右翼艦隊から掃討の完遂ならずという一報と、奇妙な実験艦の存在に注意を促す警告を受けた事により、艦隊の配置に少々変更を加える指示を出すに当たって参謀に意見を求めた。

「強襲艦隊の報告にあった実験艦だと思うか？」

「恐らくは。映像を見る限り、右翼艦隊が遭遇した護衛艦は強襲艦隊が見たものと同じの艦かと思われます」

後方宙域を離脱してこちらに向かっているシューハ軍の戦力には遊撃艦隊の残存部隊を確認しているが、推定艦数100隻以下で殆どが小型艦なうえ損傷も激しいらしく、戦闘能力は無いと判断されていた。件の実験艦が途中でこれらに合流すると思われる。

「ふむ……。強襲艦隊は下方宙域に潜伏。後方の護りを固めつつ左翼艦隊から分隊を出して敵艦隊側面へ回らせろ、威嚇するだけでよい」

遊撃艦隊の残存部隊が仕掛けてくるとすれば、例の実験艦を中心に後方攪乱を狙って来るであろう事が予測できる、というよりも、残存部隊の戦力を考えればそれ位しかクアブラ軍の主力艦隊相手に仕掛けられる策で効果的な手立てが、他に無い。

艦隊後方の一部に防御の薄い場所を設け、そこを突いて来た所を強襲艦隊で一気に叩くという作戦を立てる。

「右翼艦隊からの報告によれば、実験艦の突入によって半数近い艦艇が被害を受けたとしています。接近させるのは危険では無いかと」
「うむ、君の懸念は尤もだ。しかしな、冷静に考えて見たまえ。一隻の実験艦が2000隻の艦隊に突入したとして……何が出来るね？」

「報告では手当たり次第に体当たりを仕掛けられ、艦列を乱されたとありますが……」

「うむ、つまりその実験艦は恐るべきシールドを搭載し、右翼艦隊の進攻を妨害したわけだ。して、右翼艦隊の被害は？」

弾薬の誘爆で爆沈した戦艦が一隻、他は小破から中破ばかり。クアブラの艦隊司令官はこの結果を見て、実験艦には恐るべき性能を誇るシールドが搭載されているようだが、武装は砲艦や補給艦すら沈める能力も持たない非力な仕様であると睨んだ。

「軍艦で体当たりなど凡そ考えられない攻撃を仕掛けられたのだ、右翼艦隊の提督もそれで泡を食ったのだろう」

「始めから来ると分かっていたら、対処のしようは幾らでもある……という事ですか」

策は二段構えで、突入された場合も想定してある。参謀は成る程と納得して頷き、艦隊司令官の慧眼に感服して見せた。

「クアブラ軍左翼艦隊より分艦隊の移動を確認！ 我が軍の側面に

回り込むようです」

「こちらも右翼艦隊から迎撃の艦隊を――いや、迎撃態勢をとって防御陣形を取らせよ、本隊からあまり離れるな」

迎撃に出した艦隊が強襲艦隊に襲われて挟撃など受けては堪らんと、慎重に指示を出すシューハ軍中央艦隊の提督。開戦前はここまです勢に追い込まれるなど思いもよらなかった提督は、どうにか被害を抑えながらここで踏ん張らなくてはと戦況モニターを睨み続ける。

艦隊総司令部の空母群は強襲艦隊の攻撃で3隻もの空母が沈められており、危うくシューハ軍の総司令官を失う所であった。遊撃艦隊の残存部隊から通信の途絶える直前に送って寄越された情報によれば、クアブラ軍は艦隊を一瞬で壊滅させる巨大兵器を投入しているらしい。

「我が軍にも一撃で戦況を引っくり返せるような切り札があればよかったのですが……」

「無いもの強請りを考えても仕方あるまい、今はその巨大兵器がこの宙域にまで持ち出されない事を祈るばかりだ。それに――」

情報を送ってきたのは遊撃艦隊の第六部隊を指揮する駆逐艦リローセ艦長、パレスティーネ・ローズバツハ嬢。艦隊総司令部で幕僚監部に務めるローズバツハ提督の一人娘だという。

パレスティーネがもたらしたクアブラの巨大兵器に関する情報は、遊撃艦隊の壊滅と彼女の生存を絡めて”幕僚の一人娘が命懸けで敵の情報を送ってくれた”という触れ込みで宣伝され、全軍の士気回復に少なからず効果を上げている。

一撃で半個艦隊を壊滅させる程の強力な新兵器が投入されていたのなら、これだけ劣勢に立たされたのも仕方あるまいという納得感を得た事で、逆境において兵達が陥り易い不安による士気の低下を

防ぎ、反撃に転ずるまでの闘争心を維持する事に役立っているのだ。

「彼女はオリジナルで参戦しているそうだからな、無事に生還すれば士気の昂揚による反攻も期待できる」

「もし戦死した場合は、弔いを果たすという意味で鼓舞する事も出来ますね。兵達は奮起するでしょう」

この戦い、勝てずとも引き分けにはどうにか持ち込めるかもしれないと、中央艦隊の提督は決着の落とし所として目標を定めた。その時、艦橋のオペレーターから敵主力艦隊に妙な動きがあるという警告が上がった。艦隊後方にレーザー砲の火線が伸びているのだという。

「第六部隊ではないのか？」

「いえ、第六部隊は戦闘宙域を大きく迂回してシューハ圈内から本隊に合流するコースを取っていますので――あっ 敵強襲艦隊を確認！」

何処に潜んでいたのか、クアブラ軍主力艦隊の後方に向かって直進する強襲艦隊をレーダーに捕捉し、メインモニターの戦況MAPにマーカーが表示される。強襲艦隊が向かっているのは敵主力艦隊の後方でレーザー砲の集中している先のようにだ。

強襲艦隊を指揮する提督は会戦の緒戦で遭遇した例の旧式護衛艦を艦橋の正面モニターに捉え、やはりあの艦かと気を引き締める。

「全艦一斉射の後ミサイルを放て、あまり距離を詰めるな、攻撃開

始！」

主力艦隊の後方を護る部隊と強襲艦隊による十字砲火がシャーヴィット号に襲い掛かる。しかし対艦レーザーの帯は尽く青白い光の膜に阻まれ、船体に届くことはない。一拍子置いて殺到したミサイルが次々と爆発し、戦艦の装甲をも焼き尽くす白い閃光がその一帯を包み込む。

「……っ やはり効かんか」

「敵艦の速度上昇！ 主力艦隊に突入するつもりの方です！」

「主力艦隊に報告、”我々の攻撃は通用せず、そちらの作戦に期待する”とな」

「了解、主力艦隊旗艦へ通信を送ります」

通信を受け取った主力艦隊の旗艦にて、艦隊司令官は強襲艦隊の迎撃が失敗した場合の作戦発動を指示した。突入してくる敵艦の進路上に荷物を空にした中型輸送艦を配置、侵入路を開いて誘い込む。

「目標艦、侵入コース2、ポイント3、6を高速で通過中」

「よし、正面の出口を塞げ、捕獲作戦を開始せよ。技術省の土産に持って帰るぞ、勢い余って押し潰さんようにな」

クアブラ軍の主力艦隊に後方から突入したシャーヴィット号は、とりあえず旗艦を見つけてそれにぶつけようと敵艦隊の中を進む内、周囲に戦闘艦の姿が殆ど見えない事に気付いた。

後方の艦列とはいえ空母や砲艦の20〜30隻はいる筈なのだが、周りには補給物資の運搬に使う壁のような大きい輸送艦ばかり。

「っ！ 周りを輸送艦で囲まれています！ 前方からも大型艦接近！ 周囲の輸送艦も距離を詰めて来ます！」

「艦長、これだけの大型艦に接舷されれば、この艦の出力では身動きが取れなくなってしまうす」

「質量のある艦で挟み込む作戦か、乗り移られる心配はないとして……シャーヴィット、守護の中から攻撃しても大丈夫かい？」

旧式護衛艦として現役時代から敵艦との戦いを生き抜いてきた戦闘艦である。艦首付近に搭載されている中距離レーザー砲4基は巡洋艦クラスの装甲であれば射程内で撃ち抜ける程の威力を誇る。総弾数200発の多目的ミサイルは8基の発射管から何時でも発射可能な状態だ。

「大丈夫よ、守護の内側から外に向けての働きかけは、何も妨げられないわ」

その答えに頷いたフェンナードは、スツと手を翳して命令を下す。

「撃て」

シャーヴィット号より放たれたレーザー砲が前方を塞ぐ輸送艦を貫く。数瞬遅れて爆発を起こす輸送艦。揃った動きで距離を詰めて来ていた周囲の輸送艦が戸惑うように艦列を乱れさせた所へミサイルを撃ち込む。進路が確保された事で悠々と前進を続けるシャーヴィット号。

クアブラ軍の艦隊司令官はシャーヴィット号にしてやられた右翼艦隊からの戦況報告内容を大きく読み違えていた。シャーヴィット号には砲艦や補給艦すら沈める能力が無かったのではなく、沈める必要がなかったから沈めなかったただけなのだ。

「前方に戦艦群の艦列！」

「戦艦の艦列か。副長、旗艦はいると思うかい？」

「あれは、恐らく最前列の攻撃艦とローテーションを組んでいる艦列の一つだと思われます」

長期間の戦闘、数日から時には数ヶ月に及ぶ場合もある大規模な艦隊戦では、燃料弾薬の補給や兵士達の休息をとる為に同じ編成で組まれた陣形の艦列を何列か用意して、時間毎に入れ代える事で絶え間なく攻撃態勢を取り続けられる。

その輪の中に旗艦が混じっている場合もあるが、指揮は別の場所から行なわれる場合もあるので旗艦の判別は難しい。

「探し出すのは無理か……一旦味方のいる所まで抜けて中央艦隊から情報を貰おう。このまま全速前進、ついでに何隻か引っ掛けて行こう」

「了解！ 進路このままで全速前進！ 進路上の敵艦はついでに引っ掛けて行きます！」

輸送艦の包囲網を突破したシャーヴィット号は、敵主力艦隊の真っ直中を突き進む。

「目標艦の捕獲に失敗しました！ 輸送艦3隻が大破！」

密集する主力艦隊の中央部に突っ込み、時折ぶつけては艦列を崩して折角整えた陣形を散らかしながらシューハ軍の陣取る宙域へと抜けて行くシャーヴィット号に、クアブラ軍の艦隊司令官は下唇を噛みながら呻く。

「ぬ……見込みが甘かったか。目標艦の進路上にいる艦は退避、空母より戦闘機を発艦させよ！ 強襲艦隊を呼び戻せ！」

矢継ぎ早に指示を出して迅速な対処を見せる艦隊司令官。何となく参謀とは目を合わせたくないので正面モニターに表示された戦況を表す戦力表に視線をやると、味方艦隊を表すオレンジの長方形の中を、敵艦を表す小さな赤い点が通り抜けていく様子が映し出されていた。

シューハ軍中央艦隊の旗艦ではクアブラ軍艦隊の動きに注視するレーダー手が、敵主力艦隊の中に味方艦を表す反応がある事を不審に思いながらも提督に報告を上げた。

「現在、味方不明艦は敵主力艦隊の中央を通過中」

「敵主力艦隊の攻撃密度が15%低下しました、自軍左翼艦隊が僅かに押し返しています」

「罨か……？ いや、さっきの後方への砲撃と強襲艦隊の動きを考

えるなら……」

クアブラ軍主力艦隊の攻撃に乱れが生じた為、空いた隙間を埋めるように攻撃艦を前進させてシューハ軍の掌握する領域を少しずつ広げて行く。流れが変わりつつある戦場に反攻の機運を感じ取った兵士達の間で、ようやくその時が来たかという士気の昂揚が広まる。

実はこの微妙な雰囲気に含まれている時が最もやっかいな時間でもあった。こういう状態から反撃の糸口を掴めず昂揚が醒めると、反動で一気に崩れる場合があるのだ。糠喜びの失望感は大い。

今、一斉反撃に転じるべきか、もっと慎重に戦況の流れを見定めるべきか、この劣勢の中であって中央艦隊の提督は迷う。その時――

「不明艦が敵艦隊を突破しました！ これは……遊撃艦隊第六部隊所属、護衛艦シャーヴィット号と確認！」

「シャーヴィット号……？ あのメッテ家の老朽艦か」

単艦で敵主力艦隊の中を突破して来たのかと、旗艦の艦橋に詰める乗組員は勿論、戦況モニターで戦場の様子を見守っていた全艦の将兵達から感嘆とも訝しみともつかない声がこぼれる。

「シャーヴィット号より入電！ 第六部隊率いる遊撃艦隊の残存部隊は全艦の損傷が深刻につき、至急救援を要請するとの事です！ あと、敵主力艦隊の旗艦に関する情報の照会を求めています」

「この状況で救援など出している余裕があるか、敵旗艦の情報なんぞこっちが知りたいくらいだ！ それよりも今空いた穴を突け！」

今の騒ぎでクアブラ艦隊に出来た隙間を突いて戦艦を押し込み、反撃の足掛かりを掴もうと指示を出す提督。律儀にも提督の返答をそのまま送信する通信士。すると、シャーヴィット号からは了解し

たという趣の返信が届く。些細な命令の行き違い。

「えっ！ し、シャーヴィット号、転進！ 敵主力艦隊に再突入！」
「なんだと！」

艦橋にざわめきが上がる。たった今単艦で敵艦隊横断という奇跡の強行突破を果たしたばかりの小型艦が、今度は無謀にも正面から敵主力艦隊に突っ込んでいったのだ。巨大な壁の如くずらりと並んだクアブラ艦隊の戦艦群から一斉に対艦レーザーが放たれた。

欠片も残さず蒸発するのではないかと思える程の集中砲火から飛び出したシャーヴィット号は、そのままの勢いで正面のクアブラ軍戦艦に突っ込んだ。標的となった戦艦は慌てて回避しようと艦首を横に向け始めた所で、まるでぶん殴られたかのようにぐると船体を傾ける。

『艦首砲門付近にぶつけられた！ 対艦レーザーはおしゃかだ、攻撃の続行不能につき後退の許可を申請する！』

『艦列の後ろに入り込まれたぞっ 戦闘機を出してくれ！』

『戦闘機じゃ無理だ、駆逐艦を迎撃に回せ！』

『こちら第三攻撃艦列四番艦、機関部をやられて航行不能だ、救援を請う』

クアブラ軍は艦隊内部で暴れ回るシャーヴィット号にどう対処すれば良いのかと、被害報告やら救援要請やら問い合わせの通信で混乱状態に陥っていた。旗艦に繋がり難く”戦線を維持せよ”以外に具体的な指示も下りてこない為、近くの艦同士で通信が飛び交う。

『空母は後方の旗艦に張り付いてるらしいから、こっちにまで戦闘

機は回せないとさ』

『お前の艦には艦載機があるだろうが！ それを出せよ』

『さっきハッチにぶつけられて発艦不能なんだよっ』

『おい、何処の艦だっ 後ろの列から主砲ぶっ放しやがったのは！』

『バカヤロウ！ 味方に当てる気か！』

ほぼ密集状態の艦列を狙って縫う様にぶつけながら駆け抜けるシャーヴィット号に対して、シユーハ軍と正面から対峙しているクアブラ軍は迂闊に持ち場を離れる訳にも行かず、最前列の攻撃陣形を崩せないが故に好き勝手背中を突付かれている格好だ。

クアブラ軍の陣形が僅かにだが広範囲に渡って乱された事で攻撃の精度も下がっていき、シユーハ軍に反撃のチャンスが訪れる。

「敵主力艦隊の攻撃密度、60%まで下がりました」

「提督！ 今なら攻勢に出られます！」

「よ、よしっ 左翼艦隊は分隊を護衛に残して中央艦隊と連動しつつ前進！ 右翼艦隊は側面より敵後方に回りこめ！ 大回りで構わん」

シャーヴィット号の単艦突撃で敵艦隊が引っ掻き回される様子を、暫し呆然とモニターに眺めていた提督は参謀の言葉で我に返ると、予め立てておいた反撃の手順に従って全艦に攻勢の指示を出した。

重力制御が働いているにも関わらず光の粒がふわふわと漂い、宙に浮いた髪束が水中の波に揺られているかの如くゆっくりとたゆたう。既に見慣れてきた感のある”守護者”^{ガルデ}の姿。シャーヴィット号のブリッジ中央で守護の光を放ち続けているシャーヴィット。

「シャーヴィット、君の守護はあとのくらいまで持つんだい？」

「そうねえ、この調子ならまだ半日ちよつとは大丈夫かしら」

「そうか……あまり無理をさせてはいけないな」

味方の艦隊が攻勢に出始めたのを確認して適当な所でクアブラ艦隊から抜け出したシャーヴィット号は、かなり離れた場所を航行中の第六部隊と合流すべく、戦闘宙域からの離脱許可を中央艦隊に求めたのだが、それは直ぐに艦隊総司令部の方から了承された。

「艦隊総司令部からの通信に艦長宛の秘匿メッセージが届いています。そちらへ回します」

通信士から艦長席の端末に回されてきたメッセージには、『娘をよろしく頼む』というローズバツハ提督の極めてプライベートなメッセージが添えられていた。

「これは……パレスティーネの無茶が功を奏したって所かな」

「強硬派で知られるローズバツハ提督も、人の親だったという事でしょうか……あつ　も、申し訳ありません、つい」

艦長席の傍に控えているミーシア副長はフェンナード艦長があまりにも自然に端末モニターを目線で示しながら声を掛けてきたもの

だから、会話の流れでうっかり秘匿メッセージに目を通してしまい、感想まで述べた事を慌てて謝罪する。

「ははは、いいよ。君の意見も聞こうと思ってたし」

「い、意見も何も……」

これは部下に意見を求める類のメッセージとは違うのでは？ と戸惑うミーシアに、フェンナードは『いいからいいから』と笑って返す。

戦いの光が明滅する戦闘宙域を離れたシャーヴィット号は、満身創痍の船体で残存部隊を先導する駆逐艦リローセに部隊復帰の通信を送ると、彼等の曳航を手伝いに全速力で進路を向けるのだった。

第七話（後書き）

次で終わりの予定です。

最終話

要塞砲を警戒してクアブラ圏内の宙域まで侵攻出来ないシューハ軍に対し、クアブラ軍もシャーヴィット号の突撃を警戒して要塞砲の防衛に戦力を割くと、消極的な防御態勢を継続けた為に両軍は膠着状態に陥った。

その間、両陣営の政府上層は会戦で得た敵勢力の情報を分析して話し合い、協議した結果、講和派の意見が通って停戦に繋がった。

シューハはクアブラの戦術向上にみる艦艇の性能アップや艦隊運用の進化に加え、要塞砲の存在など、今後豊富な資源と物量を活かした戦略を展開して来るであろう事に危機感を覚え、強硬派も態度を軟化させたのだ。

クアブラはクアブラで、たった一隻の実験艦に今までの常識ごと戦況を引っくり返されたとして、今後あのような高性能シールドを搭載した艦が出てくる可能性に危機感を覚えた上層部が、講和を急ぐ声に同調した。

科学力や技術面でシューハに大きく立ち遅れているクアブラは、表面的にだけでも友好と交流を深めながらもっと技術を吸収し、力を付けた方が良いという政治判断に後押しされた格好である。

斯くして、シューハとクアブラの国境宙域で行なわれた大会戦は、当初劣勢だったシューハ軍が最初の位置まで戦線を押し返した所で十日ほど両軍の睨み合いが続いた後、シューハ政府とクアブラ政府

の間に停戦協定が結ばれて終結した。結果はほぼ痛み分けであった。

本隊を離れて一足先に惑星シューハへ降下するフェンナード達。

シューハの強硬派が態度を軟化させた裏にはもう一つの理由として、シャーヴィット号の存在がある。レーザーもミサイルも通さず、体当たりのダメージさえ抑えてしまう謎の新型シールドを搭載した旧式艦。

——シューハ圏内の宙域近くで第六部隊と合流したフェンナード達は、とりあえずパレスティーネ艦長に説明を求められた事でどう言い繕おうかとシャーヴィットも交えながら相談し合った結果、事情を話した上で口裏あわせに協力して貰おうという方針で纏まった。

「^{ガルデ}”守護者”の魔法、ねえ……」

「まあ、僕も全てを理解できてる訳じゃないんだけどね。ただ信じてみたのさ」

駆逐艦リローセから一人でシャーヴィット号に乗り込んで来たパレスティーネは、なんとも不思議な光景の広がるブリッジの中心で身体から光を溢れさせている何処か遠い宇宙の彼方より現われたらしい来訪者を見つめる。

「分かったわ、貴方がそう言うなら、私も彼女を信じましょう」

「ありがとうパレスティーネ、助かるよ」

「礼を言うのはこちらの方だわ、貴方達がああしてくれなかったら、私達は今頃宇宙の塵だったもの」

シャーヴィットの守護については敵の通信を傍受した際に捉えた
”新型シールドの実験艦”という設定をそのまま使って誤魔化す事
にした。

メッテ家がシャーヴィット号を手放さなかったのは、単に祖父が
乗艦していた縁の深い艦だからというだけでなく、フェンナードの
祖父は画期的な宇宙船用シールドの開発研究を秘密裏に行なってお
り、シャーヴィット号にはその試作型が積まれていたのだ。

今回の会戦にこの一隻で参加したのは、祖父の開発した試作シ
ールドの実証実験も兼ねていた。と、適当なシナリオをでっちあげる。

「問題は、その試作シールドがどうやって消失したのかという工作
よね、あと乗組員の口も塞がなきゃならないわ」

「その辺りは副長が上手く考えてくれたよ」

何となく危険な響きを感じさせるパレスティナの言葉に、ブリ
ッジクルー達が少しビクビクしているのを苦笑しながら、フェンナ
ードはミーシアに『試作シールドは如何にして消失したか』につい
て語ってもらう。

その内容とは――先のシャーヴィット号の活躍は、新型シールド
発生装置が敵の攻撃によって一部損傷し、暴走を起こした事から始
まる。

異常出力によるシールドの暴走であらゆる攻撃に対処出来る効果
を実証できたが、エネルギー切れでシールドの暴走が治まった時に
は発生装置の中が完全に焼き付いており、秘密裏に研究されていた
せいか設計図などの詳しい資料が全く残されておらず、修復や再現
は不可能。

更に、乗組員の一部には幻覚を見たり異常行動を取る者が出るな
ど、人の精神に深刻な影響を及ぼす事が分かった為、この強力なシ

ールドは装置ごと処理された——という話で通す。

「シールド発生装置が暴走して壊れたという部分はちょっと強引だけれど理解できるわ。けど、乗組員の精神に害を及ぼすというのは？」
「実は、この艦に左遷されてきた警備部長に少々問題がね……」

幸い、とは言い難い事だが、例の警備部長が懲りもせずシャーヴィットやミーシアにまでちょっかいを出そうとして”魅了”^{チャーム}系の強力な術を受けた影響で、常時脳内のお花畑を散歩するちょっと危ない状態の人になってしまったのだ。

其れというのも、許可無く自白剤を使おうとした事に目を瞑る代わりに密航者^{シャーヴィット}の存在を口外しないという取り引きで成り立っていた隠蔽工作が、守護の力を得たシャーヴィット号の活躍で崩れてしまったのが原因であった。

密航者の存在を隠蔽する事と、間違いなく暴行目的と捉えられるであろう越権行為を働いた事とは、密航者の存在に口を噤んで暴行未遂の事を黙っていて貰った方が得になる。

だが、シャーヴィットという絶対の守護をもたらせる存在の秘密を上層部に届け出れば、密航者に対する暴行未遂を暴露されても帳消しに出来る程の重要な情報として扱われる筈だ。

警備部長側にとって黙っていた方が利益になるという前提が崩れ、逆に黙っていて欲しければシャーヴィットを自分の自由にさせる等という要求を突き付けて来た。

『その女が艦を護るのに忙しいというなら、副長でもかまわんぞ？
ふひひ……』

そう言って下卑た視線をミーシアに向けた警備部長は、ブリッジ

の中央からホワホワホワっと飛んできた何かを頭にくらって卒倒。目が覚めてから世界が素晴らしさに満ちている事に気付いて感動した彼は、終始にこやかな笑顔を浮かべながら優雅な艦内散歩を楽しんでいる。

シャーヴィット曰く、ちよつと記憶を飛ばして素直になって貰うだけのつもりだったのが、魔法に耐性の無い世界の人間であった事が災いしたらしく、ほぼ”精神破壊”並の効果を与えてしまったのだそうだ。

「……中々怖ろしい力なのね」

「まあ、彼の状態を例にして試作シールドには色々問題があった事にしようかと」

後はブリッジクルー達に”光の粒が舞う光景”などの幻覚を見たという証言をして貰う。船体の亀裂を塞いでいる謎の物体はメッテ家が契約している宇宙船ドックにシャーヴィット号を預けてからドックの整備員が来る前に取り払い、シャーヴィットの居た痕跡を全て消し去る。

地上に下りてメッテ家の領地に着けば、シャーヴィットとはそこでお別れとなる予定であった。

そんなわけで、シャーヴィット号に搭載されていた新型シールドは量産するどころか、構造もよく分からず再現する目処すら立たない事を示された強硬派は、今後に向けて研究開発を進める為にも時間と資源が必要だと判断し、クアブラとの講和に反対しなかった。

一刻も早く会戦で見たような性能を誇る新型シールドを完成させて配備したい強硬派としては、シャーヴィット号を接收して隅々ま

で詳しく調べたい所だったが、今回の戦いでメッテ家の活躍が無ければ危なかった事は全軍の将兵達が知るところである。

敗戦の危機を救ってくれた救国の英雄に、ただ一隻しか所有していない艦を寄越せというような要求は流石に憚られる状況だ。また、娘と軍を助けてくれたフェンナードに思うところを持った某軍閥さんの思惑も絡み、メッテ家はそっとして置かれる事になっていた。

宇宙船ドックから地上へと向かうメッテ家の専用シャトルの中で、シャーヴィットは経験した事のない高度から眺める地表の景観に感嘆の声を上げていた。

「凄い……星の世界だと実感できなかったけど、世界ってこんな風に出てくるのね……」

豊かな水源が広がる水の惑星シューハ。綿を千切って振り撒いたような雲の隙間から見え隠れする緩やかに円を描いた地平線。地上は余すところなく建造物がひしめき合い、蜘蛛の巣のように張り巡らされたラインの上を幾つもの光の粒が走っている。

「魔法で空は飛べないのかい？」

「飛べるけど、こんな高い所は無理ね。あたしの住んでた所も、雲の上まで昇ればこんな光景が見られるのかしら……」

成層圏から眺める地上は美しい。初めて見る景色を子供のように喜ぶシャーヴィットの姿に、ブリッジで見た守護の奇跡を起こす神秘的な女性の姿が重ならず、フェンナードはあまりのギャップに笑ってしまった。

やがてメッテ家の領地に入ったシャトルは、フェンナードが住む屋敷の庭園に設けられているシャトル発着所に着陸した。

「立派なお屋敷ね」

「ありがとう。部屋を用意させるから、今日はゆっくり泊まって行って欲しい。直ぐに食事も準備させよう」

「ううん、折角だけど早く戻らなきゃいけないから、ここで失礼するわ」

「そうかい？　まあ、無理に引き止める訳にはいかないけど……」

フェンナードは少し残念そうにしながらも、必要なモノがあれば協力すると申し出てくれた。彼にとつてシャーヴィットは色々な意味での恩人である。彼女の要望に応えた身柄の保護とシユーハへの上陸など、彼女の守護がもたらした益に比べればまるで釣り合わない。

是非とも何か恩返しをしたいと訴えるフェンナードに、シャーヴィットはふむと考える。この世界の文化や技術は実に興味深い。

「それじゃあ、時々遊びに来てもいい？」

「勿論、歓迎するよ」

良く手入れされている庭園の一角。芝生の上をさくさくと歩き回り、転移陣を使うのに適した『空間の安定している場所』を探すシャーヴィット。その間、フェンナードは出迎えに現われた使用人達を下がらせ、屋敷の傍から彼女の様子を眺めている。

そうして丁度良い場所を見つけたシャーヴィットは、徐に手を翳

して地面に転移陣を焼き付けると、魔力を流し込んで起動させた。

「っ！ シャーヴィット」

シャーヴィットを中心に浮かび上がる幾重もの光の輪。その光景に、フェンナードは思わず声を上げる。彼女をシャーヴィット号に運んで来た”転移陣”がどういうモノであるかは事前に聞いていたが、実際にその魔法を目の当たりにすると不安や驚きを隠せない。

「じゃあ、またね？ フェンナード」

アツサリとした別れの挨拶を残し、光に包まれたシャーヴィットはこの惑星上から消えた。あまりにもアツサリし過ぎて、フェンナードは暫らくその場から動くことが出来なかった。庭園に残された転移陣の痕跡からは、仄かな光が立ち昇っては消えていく。

「言葉もないとはこの事だな……」

ぽりぽりと頬を搔いたフェンナードは、転移陣跡の立ち昇る光を眺めながらぽつりと呟いた。

「フェンナード様ー？ ローズバッハ家のパレスティーネ様から通信が届いておりますが」

「ああ、直ぐ行くよ」

使用人から連絡を受け、フェンナードはようやく屋敷へと足向けるのだった。

遙か遠い見知らぬ惑星から守護院寮の自室に帰還を果たしたシャーヴィットは、薄暗い部屋を見渡してほっと一息。少々人の入った形跡が残っているが、荷物もそのままにされているので守護者の除名はされていないようだ。

「とりあえず、院長に事情を説明しに行かなきゃね」

何時もは転移陣で広い守護院内を移動していたシャーヴィットだったが、流石に今は横着しようとは思わない。歩いて部屋を出たシャーヴィットは十数日ぶりに帰って来た寮の廊下に軽い足音を響かせながら、ノンビリと院長室へ向かった。

突然十日以上も行方不明になった事で色々と問題になっていたシャーヴィットは、転移陣の事故で偶然到着した遙か遠い世界の異文明について、そこで見たモノや経験した事を語り、守護院の術者達のみならず上層の指導者達からも大いに関心を持たれた。

しかし、転移陣を使ってその惑星に転移するには膨大な魔力が必要であり、普通の術者では観察しに行く事が出来ない。よって、今後シャーヴィットには異文明の技術研究をする為に交流役として、定期的にその惑星を訪れる任務が課せられる事になった。

「そんな訳で、これからもちよくちよく遊びに来る事になったけど、よろしくね？」

「ははは……歓迎するよ、守護者シャーヴィット」

おわり。

最終話（後書き）

色々想像して楽しんで貰えればという事で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9432n/>

彗星の魔女

2011年5月14日21時00分発行